

ミヒャエル・エンデの文学作品における自由の諸相

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 良孝 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00000480">https://doi.org/10.14945/00000480</a>

# ミヒヤエル・エンデの文学作品における自由の諸相

小 林 良 孝

ミヒヤエル・エンデ文学作品の中では、その物語の進展の方向が決定される重要な場面に到ると、あるいはまたその物語の主人公の運命が決定される重要な場面に到ると、必ずと言っていいほどいつも、明確に意識的に「自由」という言葉が持ち出され、あるいは「自由」という概念に属する言葉が持ち出されてきて、その「自由」にその物語の進展の方向の決定がゆだねられたり、その主人公の運命がゆだねられたりしている。

このことは、エンデが31歳の時の彼の処女作である『ジム・クノップ』2部作において既にあてはまることである。これの第2部『ジム・クノップと荒くれ13』の第25章「ジム、自分の生まれの秘密を知る」の章では、ジムによっていったん捕らえて縛りあげた12人の海賊の命を、ジムは助け、その捕縛を解く決心をする。ジムのこの寛大な処置に対して、海賊たちのうちの一人が答えて言う。「それにむくいておれたちは、おまえとおまえの友人たちに自由を与えてやることにするぞ。」<sup>(1)</sup>こうしてジムの運命は決定されていくのである。

この自由というテーマは、エンデが年齢を重ねて行くにつれてますます重大なものとなっていったようで、彼が晩年に近づいていけばいくほど、彼の文学作品の中で占める自由の比重もますます大きくなっていくと同時に、自由の概念もますます進化していった。

1972年、彼が43歳の時の作品『モモ』においても、圧倒的な多数と圧倒的な圧力で迫ってくる灰色の男たちに対して、孤立無援ではあったけれども、モモはけっして彼らに屈することはなかった。つまり、モモは彼らに対する自由を貫いた。逆に、理髪屋のフージー氏や観光ガイドのジジ＝語り部のジロラモや道路掃除夫のベッポじいさんなどは、灰色の男に勧誘されたり、説得されたり、強迫されたりする場面では、灰色の男から明確な言葉で決定の自由を与えられながらも彼に屈服するのである。

1979年、エンデが50歳の時の作品『はてしない物語』は、部分的にはなく

この作品全体が子供にとっての自由の持つ意味を論じている物語であると言えるであろう。

1991年、エンデが死ぬ3年前、彼が62歳の時の作品『レンヒェンの秘密』は、誰が読んだって一目瞭然、これはレンヒェン（レナーテの愛称）の両親に対する我がまま（一種の自由）を主題とした作品である。

その翌年1992年、エンデが死ぬ2年前、彼が63歳の時の作品『自由の牢獄』は、内容を読まなくたって、その標題を見ただけで、この本は自由をテーマとして書かれてあるのであろうと推察される。実際に内容を読んでみると、何が自由なのかわかりづらい。けれども自由というものはそういうものなのだ。この作品を構成している一つ一つの短編は各々、エンデが63歳になるまで、自由について考えてきた所感を、つまり彼が発見したいろいろな自由の形態を、作品の形で述べたものなのであろう。

1993年、エンデが死ぬ1年前、彼が64歳の時の作品『満月の夜の伝説』は、10歳前後の読者にとってはとてもそうとは受け取れないかもしれないけれども、エンデが生涯かけて追究して到達した自由についての考えの頂点を示すものであろう。この作品は、自由というテーマを少しも感じさせない。しかしこの作品は、自由という問題と真っ向から立ち向い、四つに組んで全力で闘い取った、彼の総決算とも言うべき成果を表現しているものであろう。しかもこの作品は、彼の数多い短編の中でも最も充実した作品の一つである。

1994年、エンデが没した年、彼が65歳の時の彼の最後の作品『魔法の学校』は、小学生を相手に7課の教程の形をとって、魔法のかけ方を実習形式で説いた短編である。実はその教程内容は自由の実行の仕方にも通じることなのである。

以上のように、エンデの処女作『ジム・クノップ』の2部作から彼の絶筆となった『魔法の学校』に到るまでの彼の創作活動を概観すれば、「自由」というテーマは彼が年を取って行くにつれてますます重大なテーマとなっていたことは明確に読み取れるのである。彼の初期の作品においては、「自由」という概念は、まだ各々の作品の主人公の運命を決する根底的な状況として設定されていたにすぎない。しかし、中期から後期へ進んで行くにつれて、「自由」という概念はもはや各々の主人公たちの根底的条件として扱われている程度を超えて、次第に自由それ自体が、これは作品によっては、あるいは場面によっては、意志とか願いとか希望とかという形で、あるいは拒否とか反抗とかという形で表されることもあるが、次第に自由そのものが物語の主題として構想され創作されるようになっていったと見るのであろう。というわけで、本稿に

おいては、ミヒヤエル・エンデの文学作品の中では、自由というものがどういう形で、あるいはどういうものとして表現されているか、これらの点に焦点を絞って論じていくことにする。

## I. エンデにとっての自由という問題の発端

ではまず、エンデにとってこの自由という問題は、いつ頃、どういう状況の中で、どういう意味を持つものとして浮上してきたのであろうか。これらの点に関しては、エンデ自身、子安美知子氏との対談の中で次のように語っている。

エンデ …私が30年以上にわたって、非常に集中的にシュタイナーの著作を読んできていることは事実です。

子安 だからこそ、この『私の読書』にも、冒頭の莊子に続いてシュタイナーの『自由の哲学』があがっています。それで、ぜひおうかがいしたい。エンデさんが、愛読書を選ぶ基準にしたのは、「私の人生の何らかの分岐点で道を方向づけ、決定的な影響を与えて、私を何らかの洞察にいたらしめた本、あるいはその後の人生ですっとかかえなければならぬような問をつきつけた本」だと、まえがきにあります。その意味でシュタイナーは、エンデさんに、いつ、どのような決定的出会いとなったのでしょうか。

エンデ まず父が、シュタイナーの思想に親しみ、それで私は父の口から彼の名をよく聞いてはいました。けれども自分から興味を持ったのは、25、6歳のころでした。もちろん17、8歳の時期、シュタイナー学校にも行っていましたが、そこで直接アントロポゾフィーを学んだわけではなく、卒業後はむしろ、アントロポゾーフと呼ばれる人たちには距離をおいていたのです。それからやがて、私はひとつの問にゆきあたった。いったいこの世に、生きたもの、魂をもつものについて何かを教えてくれる「学問」はないのだろうか？ なぜなら現代の学問は、みな自然科学的で、それは生命なき世界のことなら正確に知らしめてくれる。つまり物理学とか化学のことです。でも、その学問は、生きた事物を解明するには適さないことにぶつかっていました。そこで、私は魔術や錬金術の本を読みあさりました。その中で何人か新しい作家たちの名前が、くりかえし引きあいに出されていました。そしてシュタイナーの名は、ほとんど必ずもちだされていた。そこで初めて、私は自分から彼の本を買いました。『歴史兆候学』、それから『自由の哲学』です。この2冊を読んだのが決定的な出会いで、以来私はシュタイナーを手放せなくなったのです。<sup>(2)</sup>

この会談によれば、エンデ自ら興味を持ってシュタイナーを読み始めたのは、エンデが25、6歳の時だったという。その時エンデが特に興味を持ったシュタイナーの本は、『歴史兆候学』という本と、『自由の哲学』の本であったという。とすれば、エンデが自由の問題に自ら進んで取り組むようになったのも、彼が25、6歳の時からだったということになる。はたせるかな、それはエンデが処女作『ジム・クノップ』2部作を世に送り出した31歳の時よりさかのぼること5、6年も前の頃からだったということになる。

時期についてはそれはそれとして、エンデにとってこの自由の問題がぬきさしならぬ問題として浮上してきたのは、彼が心というものに関心を持ち、心を知るためにいろいろな著作家・思想家の本を読みあさっていた過程においてであったという。従って、エンデにとっては自由の問題は、心の問題という大枠の中の一つの問題だったのである。

では、エンデに「その後の人生ですずっとかかえなければならぬような問いをつきつけた」シュタイナーは、どういう思想の持ち主だったのだろうか。シュタイナーは1919年に刊行した『社会問題の核心』という著書の中で、1789年に起きたフランス大革命の標語であった自由、平等、博愛に言及して、次のように述べている。

経済生活上の協力が「博愛」の精神に立脚していることをまずもって理解する。第二段階として、純粹に人間関係に基盤をおく社会生活上の権利関係においては「平等」の理念を実現すべきであろう。そして、社会において自律的な特性をもつ精神的領域においては「自由」の理念が確立されなければならない。<sup>(3)</sup>

エンデはシュタイナーの言説・思想をかならずしもすべて鵜呑みにしていたわけではないけれども、精神活動は自由の下に営まれなければならないし、経済活動は博愛の精神によって営まれなければならないし、法活動は万人に対して平等に営まれなければならないというシュタイナーの思想には完全に同感だったようである。その確信は、彼が65歳で他界するまで、強まっていきこそすれ、弱まることはなかった。エンデがシュタイナーのこの思想に自ら進んで取り組むことになった25、6歳の頃は、精神と自由の問題に最も強い関心があつて、政治（法）や経済については比較的、関心が弱かったようであるが、1972年、彼が43歳の時出版した『モモ』あたりから、経済と博愛の問題にも、批判的な形を取りながら関心を強めていったようである。とは言っても、心と自由の問題に対するエンデの関心は薄らいでいくどころか、ますます強まっていったと

いうことは既に見た通りである。エンデが53歳の時、1982年3月5日と6日の2日間に渡って、エンデと、政治と芸術との総合をめざす社会運動家ハンネ・テヒルと、政治家エアハルト・エプラーとの3人で行なわれた鼎談の中で、エンデは次のように言っている。

エンデ ぼくらはみんな…フランス革命の三つの理想を心に持っていて、それを実現したいと思っているようだ。あの、自由、平等、友愛という理想だ。…統一国家をつくって、そこで三つの理想を可能なかぎり実現しようと考えていたわけだ。そのさい、まったく気づかなかったこと、あるいは、気づこうとしなかったことがある。それはね、国の使命は、理想を三つとも実現することじゃなくて、ひとつだけ実現すればいいってことなんだ。使命から定義すれば、国とは、法律をつくり、適用しなければならない組織なんだ。そしてまた国という組織はたくさんの国民とかかわっているんで、法律をみんなのものにしなければならない。というわけで国は、三つのうち二番目の理想、つまり平等しか実践できないんだ。…

精神のこととなると、話がちがってくる。

「精神」の場合、厳密に言って問題になるのは、ただひとつ、個人の才能だけだ。ここでは、どんな一般化もまちがっている。…だが、そんなことをすれば「精神」のほんとうの課題を素通りすることになる。つまりね、ひとりひとりの才能をそれぞれ伸ばすという課題を避けてしまう。「精神」にかんしては、自由の理想があてはまる。「精神」は、できるだけ束縛されていないことが必要だし、「精神」は各人各様の能力に応じて、それぞれ独自のかたちで形成されなければならない。第三の理想は友愛だね。…あえてぼくは、友愛は近代「経済」に内在している掟である、と主張する。「経済」にたいして、例の「需要と供給の自由なゲーム」を適用させることはできない。そうすると「万人の万人に対する戦い」<sup>(4)</sup>となり、経済的に最も弱い者がいつも割を食うことになるからだ。…ともかくここでもまたもや、「経済」の交通整理は国の使命とはいえなくなる。…「経済」は、自前の機関をつくり出さなくちゃならない。国には従属しないものをね。たとえば、独立した消費者共同体とか生産共同体といったような機関だ。こういう考えが何に基づいているか、…まず第一にフンボルトの「国家の権力の限界について」…というエッセイだ。それからね、ルドルフ・シュタイナーが始めた社会有機体三層化運動の中で、その考えは詳しく論じられ、精密に練り上げられている。<sup>(5)</sup>

本稿では、「自由」の問題に焦点を合わせてエンデの文学作品を読み解いていくことにしよう。そこでまず、エンデが25、6歳頃出会い、その後ずっと生涯の間、彼に抜き差しならぬ問題をつきつけてきた自由の問題のきっかけとなったシュタイナーの『自由の哲学』という本を、エンデとの関係において概観してみることにしよう。この本の第I章「意識的人間の行動」は、次のような言葉で書き起こされている。

人間は、思考と行動において精神的に自由な存在なのであろうか、あるいは純粹に自然法則的な堅固な必然性下にあるのだろうか。この問題に対して程多くのすぐれた洞察力がそそがれてきた問題は多くはない。人間の意志の自由という理念に関しては、頑固な反対者が多数いたと同様に、熱烈な支持者もたくさんいた。自由のような明々白々たる事実を否定する人を道徳的な情熱をこめて偏狭な精神の持ち主だと宣言する人もいる。こういう人々に対峙して、人間の行動や思考の領域では自然の法則性は通用しないと信じている人がいることも事実だけれども、正にそのことはその人の非科学性の極みであるとしている人々もいる。ここでは、全く同一のものが、かたや人類の最も貴重な宝であると宣告され、かたや最もいとわしい幻影であると宣告されているのである。<sup>(6)</sup>

まず、ここで提起されているのは、人間対人間の社会領域での自由の問題ではなく、個人としての人間の精神と行動の領域での自由の問題である。この領域において、そもそも人間は自由な存在なのか、それとも自由ではない存在なのかという、自由についての最も根本的な問題が提起され、ついで、この問題に関する古来からの人類の叡知がたどりついた結論が客観的に簡潔に紹介されている。要するに、一方の人々の結論としては自由は存在する、他方の人々の結論としては存在しないのである。自由の問題に関して更に進んだ客観的な結論を筆者として出すとすれば、自由の問題は論理的には解決不可能な問題であるといわざるを得ない。自由の問題は、アリストテレスの用語の意味において典型的なアポリアなのである。

では、理論としてではなく現実として、人間の思考や行動は自由に行なわれているのか、何らかの強制によって行なわれているのか、という現実の意識の問題としてみれば、今度はその現実の具体的な条件によって、ある人は、ないしはある場合は、明白に、純粹に、確実に、存在することもあるし、存在しないこともある。

いうまでもなく文学作品は、論理学でもないし、ありのままの現実の純粹な書き写しでもない。とはいえ、文学作品は論理と無関係でもあり得ない、と同時に現実と無関係でもあり得ない。エンデの文学作品の場合、当然のことながら彼自身の生活体験としての現実が確固たる基盤となっている。その上で、エンデの文学作品は、この自由の問題に関しては、シュタイナーの『自由の哲学』理論と強い関係を持っているのである。シュタイナーは、精神一元論、特に直観に基づく自由の存在の主張者である。自由の問題に関しては、エンデはシュタイナーに対して強い親近感を持っていたと見ていいであろう。エンデは、子安美知子氏との対談の中で次のように語っている。

エンデ …現代の世界はすべて、因果律的論理の上に構築されています。テクノロジーは、つねにこの論理の枠内にとどまらなければ機能しません。…しかし、こと人間となると違ってくるはずです。人間には、原因・結果の論理だけでは規定しえない面が、はっきりあります。私は、今日の自然科学の方法による人間像に、断固として異議を唱えます。科学が人間をも因果論で説明しようとするやり方に――。…

直観が因果関係によって生じてくることは、決してない。不可能なことです。ただ、それは無前提に生まれる、という意味ではありませんよ。前提がない、ということと、因果関係ではない、ということとはよく区別しておきましょう。世界のあらゆることがらに、前提はいつもあります。でもそれは、未来を規定する条件ではない。…因果律を人間にあてはめるとしたら、そこには自由が存在しない。そして、人間の中に自由がないとなると、創造力も認めないことになります。人間の創造性というのは、いつも因果律的束縛なしに、何かまったく新しいものを、自分の中から生み出すことです。新しい芸術フォーム、新しい理念、新しい行動様式、それを自分の中から出してくること。そしてまさにその中にこそ、人間の価値があると私は思います。これが人間と動物とを区別するものでしょう。…新たな始まりをつくり出す力こそ、神と人間に共通する力だし、人間の真の価値なのです。<sup>(7)</sup>

ここでは引用から省いたけれども、エンデは人間の自由の問題を人間以外の動物、たとえばミツバチとの対比において論じている。エンデの主張によれば、動物の行動は完全に本能に束縛されている。本能は自然科学の依拠している因果律に完全に束縛されている。従って、動物の行動は因果律に完全に束縛されており、動物の行動には自由はない。これに対して人間の精神は、決して完全



に本能に束縛されているのではなく、動物は持っていない「直観」という能力をも持っている。人間の持っているこの直観は、神の創造力と共通のものであって、決して現代の自然科学の依拠している因果律に束縛されているのではない。従って、この限りでは人間の精神は現代の自然科学が依拠している因果律から自由である。つまり、人間の思考や行動は、現代の自然科学を成り立たしめている因果律によっては、必ずしも完全に束縛されているものではない、という主張なのである。エンデは、河合隼雄氏との対談の中でも次のように言っている。

エンデ 私は自然科学者たちが、自分たちの自然へのかかわり方を、互いの関係性の中の一部に過ぎないと認識している限りは、そのかかわり方を否定しません。同じように人間を自然科学的に扱うことも、否定しません。けれども、それがすべてだと言ったとき、それに対して私は言います、あなた方は間違いを犯しているばかりではなく、犯罪をも犯していると。

大脳生理学者が、日々の仕事としては教壇で、すべての人間の意識は電気化学的なプロセスの総体であると説明する。…<sup>(8)</sup>

これに続いて、エンデは大脳生理学者のこの説に反論する。エンデの主張によれば、自然現象である電気化学的なプロセスによって、矛盾なく説明できるのは、パブロフの犬の条件反射とかミツバチの六角形の巣を作る本能とかの動物の意識行動のみであって、人間が持っているような不死の魂の信仰とか、道德観念とか、自由な決断とかいったものはこれによつては説明できない、と言うのである。人間だけが持っているこれらの意識活動を電気化学的なプロセスによって説明するのは矛盾である、と言うのである。河合隼雄氏との対談の中ではこれ以上進んだ考えは述べられていない。動物は持っていない人間だけが持っていると言っているエンデが言う自由な決断とか、道德観念とか、不死の魂の信念などの意識ないしは観念は、電気化学的なプロセスではないと、断固として主張するだけで、ではそれらは何なのか、ということについては、河合隼雄氏との対談の中では何も述べられていない。この河合隼雄氏との対談と、先に引用した1986年に行なわれたエンデと子安美知子氏との対談を総合して考えてみれば、人間だけが持っている自由な決断とか、道德概念とか、不死の魂の信念などは、自然科学の因果律に束縛されていない彼のいわゆる「直観」に属するものである、ということになるのかもしれない。

我々はまた、1982年に行なわれたエンデとエプラーとテヒルとの鼎談の中で、エンデは、「精神」にかんしては自由の理念が無制限にあてはまる<sup>(9)</sup>、と主張していることも知っている。他方、伝統的には、精神は理性、感情、意志の主体

であるとされている。これと、エンデと子安氏との対談を総合すれば、人間の理性も感情も意志も、自然科学の因果律に束縛されないという結論になる。更にこれを、エンデと河合氏との対談と総合すれば、人間の理性も感情も意志も、これらはいずれも電気化学的なプロセスによって必ずしも完全に説明され得るものではない、という結論になる。ところで、現代の科学では、人間の理性活動（真偽を論証する能力・真偽の判断能力）や、情動（美・快なるものを求め、醜・不快なるものから遠ざかろうとする情動）や、行動の引き金である意志決定などは、大脳皮質で行なわれるとされている。とすれば、そしてまたエンデの主張とおぼしき結論が正しいとすれば、大脳皮質において理性の活動が行なわれても、情動が強く働いていても、意志決定が下されても、大脳皮質において発生し、進行している電気化学的なプロセスによって必ずしも完全に束縛されているのではない、という結論になる。とすれば、自然科学の立脚している因果律に束縛されていないのは、すなわち因果律から自由なのは、とりわけ「直感」だけであるということではなく、理性も感情も意志もそうであるということになる。「直感」の特異性は、因果律から自由であるという点にあるのではなく、神の創造のわざに共通する能力である、という点にあるのだ。

人間以外の動物が持っていない人間特有の創造的能力といえ、1991年にNHKが企画した「アインシュタイン・ロマン」の取材陣の質問に対して、エンデが答えた次の言葉も思い出さざるをえない。

子供にとってオアシスたり得る児童文学は、大人にとってもオアシスなのですね。「文明砂漠」の遊びを忘れた大人たちこそ、もう一度、本当の子供のもつ素晴らしさを思い起こさせたいのですが。

エンデ それに必要なのは、創造力ではないでしょうか。人間の創造力とは人間の「永遠の子供らしさ」そのものです。…

人間における本来の人間らしさとは、この創造的な能力にあると思います。人間とはこの世で唯一の創造的であり得る生き物なのです。つまり、本能とか生存規則とかに拘束されていない生き物です。蜜蜂は、突如、六角形の蜂の巣のかわりに五角形のものをつくることはできません。…

それにひきかえ、人間は際限なく新しい形を作り出せますし、際限なく新しい概念を考え出すことができます。これが、私がファンタジーをあれほど重要視する理由です。

なぜなら、ファンタジーとは新しい概念を考え出すこと、すでにある概

念を新しい関連におきかえることにほかならないのですから。つまり創造力そのものです。<sup>(10)</sup>

子安氏との対談の中で、「直観」に関して主張されていたことと全く同じことが、ここでは「ファンタジー」に関して繰り返し主張されているのである。ここでエンデが言っているファンタジーも彼の言う「直観」と同様に、本能（大脳生理学者が言う電気化学的プロセス）という自然科学的因果律の拘束を受けずに、「新しい形を作り出す」能力、あるいは「新しい概念を考え出す」能力のことなのである。従ってエンデの言うファンタジーとは、空しい想い、すなわち空想ではなく、新しい形・新しい実像を想い描く力、すなわち想像力というべきものである。エンデの言うファンタジー（想像力）というのは、直観能力とならぶもう一つの創造能力なのである。

人間が行動する場合、その行動に方向を与えるのは意志である。人間が考えながら、ないしは意識的に行動する場合、その意志に方向を与えるのは、その人の感情であったり、理性であったり、更にエンデの考えに従えば、創造的な直観であったり、創造的な想像であったり、いろいろである。創造的な直観に基づいて意志決定が行われたり、創造的想像に基づいて意志決定が行われ、更にそういう意志に基づいて実際に行動が実行される場合、そういう行動は、人間以外の他の動物には見られない新しい行動であったり、過去のいかなる人間行動にも類を見なかった新しい行動であるはずだ。実際、時代の進行と共に、人間はこの種の新しい行動をくり返してきた。人間には、創造的に新しい行動をする能力・自由がそなわっていると同時に、その新しい行動を規制する新しい能力・自由、すなわち新しい行動を規制する新しい倫理観、更にこの新しい倫理観を実践する新しい道徳もそなわっているというのが、エンデの更に踏み込んだ主張なのである。そして、人間が持っている新しい道徳の創造力を表現する言葉が、シュタイナーと共にエンデが強調する「モラーリッシェ・ファンタジー」（道徳的想像力）なのである。エンデの現代文明に対する危機感は、自然科学偏重の現代文明がこの「モラーリッシェ・ファンタジー」を疎外しているという認識にもとづいているのであろう。

自由の存否が問題となるのは、上でエンデが論じているように、精神と因果律との関係においてのみではない。まず、人間は精神のみで存在しているわけではない。人間は、精神と身体＝肉体との生命的結合体なのである。それ故、人間と因果との関係で自由の存否を論ずる場合には身体と因果律との関係からも考察しなければならない可能性はある。しかしエンデは、この局面での自由

の存否については深入りしようとしなない。

更に人間においては、理念と実行能力との関係においても、意志決定と実行能力との関係においても、自由の存否は問題となるであろう。

以上は個人としての人間にまつわる自由の存否が問題となる局面であるが、こういう問題を抱えている人間は何らかの他者との関係の中で存在しているのである。従って、自由は自分と他者との関係においても、その存否が問題になる。もしも、「あなたは自由ですか？」とたずねられたとしたら、普通の人々はまずは自分と他人との関係を考えてみるであろう。

もしその人が、政治に関心のある人ならば、政治権力関係上の自由を考えるであろう。

もしもその人が社会学者ならば、まず自分と社会との関係を考えてみるであろう。

もしもその人が心の病に関心を持っている人ならば、自分と環境との関係や、過去から現在に到る心の経歴を考えてみるだろう。

あるいは、その人が歴史に関心を持っている人ならば、自分と歴史との関係を考えることであろう。

もしもその人が宗教に関心を持っている人ならば、自分と神仏との関係を考えるであろう。

その他、人は場合によっていろいろなものとの関係の中で生きている。そしてそれらの関係の中で、「私は束縛されている、不自由だ。」と感じたり、「私は束縛されていない、自由だ。」と感じたりする。

「自由である」・「自由でない」の問題として、もう一つには主観と客観の問題がある。「私は束縛されていない、自由だ。」と思っている、他人から見れば事実として束縛されている場合もある。「自由である」にしても「自由でない」にしても、主観と客観が一致している場合もあるし、一致していない場合もある。

以上のように「自由である・自由でない」ということについてただ概念的に考えるなら、おおまかに考えてみただけでも実に多くの自由の形態があり得るのである。

では、エンデは、自由をめぐる問題を、あるいは自由そのものを、文学作品としてどのように描いているのかを見てゆくことにしよう。

## Ⅱ. 「暗」としての自由

既に検討したように、エンデは自然科学の立脚している因果律からの人間精

神の自由の断固たる支持者である。それは、彼が25、6歳頃出会ったシュタイナーの『自由の哲学』によって意識化された問題であった。それから死ぬまで40年間近い間エンデ自身が考えに考え抜き、人生体験を積んでたどり着いたゆるがない確信であった。しかしその確信は「人間は自由ではない、人間に自由はあり得ない」とする彼と反対の立場をとる思想との対決の中で、あるいは自問自答の中で強められてきた確信であった。それ故、エンデは自由を否定する人々の論拠もよく知っていたことであろう。自由を否定する思想は、自由を肯定する思想と同様、文学創作の恰好のテーマとなり得るのである。

『鏡の中の鏡』の中に、「サーカスが燃えている。」という文で始まる短篇がある。1938年11月10日の夜の「水晶の夜」のような暴動でも起きたのだろうか。路上にはたくさんの自動車が乱雑にひっくりかえされていて、その何台かはまだくすぶっている。路上には割れた窓ガラスが足の踏み場もなく散らばっている。死んだ犬をまたいで、しばらく行くと路上にたまった油の中に鳥が死んで仰向けになって浮かんでいる。サーカスの道化師が、そんな路上を足の踏み場に窮しながら歩きながら、次のように考える。

おれの存在は不可解でこっけいだ。しかし、おれが自分の決断で自分の他の存在を選び取ったことなんか一度だってなかった。人は誰だって、現に今そうである人でしかありえないのだ。自由はいつも未来にあるにすぎない。過去の中に自由を探したって見つかるものではない。誰だって別の過去を探し出すなんてことは出来ないのだ。現に起きていることはすべて、そうなるべくしてそうなったものなのである。事後になってみればすべては必然的である。前もって考えてみれば必然的なものなど一つだってありゃしない。大切なことは夢から覚めることだ。それにもかかわらず、我々は自由を追いかける、追いかけることしか出来ないのだ。しかし、自由は蜃気楼のように、いつも我々の一歩先にある、いつも次の一瞬にある、いつも未来にある。そして未来は闇だ、我々の眼の前の通過不可能なまっ黒な壁だ。いやそうではない、未来は我々の両方の眼を串刺しにして侵入して来て、更に我々の頭脳を刺し貫いているのだ。我々は盲なのだ。未来によって盲目にされているのだ。我々は我々の目前にあるものを一度だって見ることはない、自分たちの鼻先にぶつかるまで、次の一秒たりとも見ることは決してない。我々に見えるのは、既に我々が見たものだけだ。ということつまり、我々には何も見えないということだ。<sup>(11)</sup>

ここで道化師が考えていることは、次の事である。

一、過去において、彼自身の自由な決断で彼自身の他の在り方を選び取ったことなど、一度だってなかった。つまり、過去においては自由は存在しなかった。

二、現在おきていることはすべて、過去からの必然性によって起きているのである。それ故、現在においても自由は存在しない。

三、未来には、自由は存在すると我々は思い込んでいる。しかし、未来は永遠に未来であり、未来に存在する自由は、永遠に未来にしか存在しない。ところが我々には一秒先の未来も見えない。未来に対しては我々は完全に盲目的なのである。従って、未来に存在する自由など、我々には見えるはずがないのである。存在すると思っているのは思い込みにすぎない。我々は存在していない自由をあると思いこんでいるにすぎないのだ。それを「存在する」と見ているのは夢を見ているにすぎない。我々にとって肝心なことは、この夢から覚めることである。

結局のところ、過去においても、現在においても、未来においても、自由は存在しない、ということが、この道化師の結論なのである。

必然性ないしは運命に束縛されて生きてゆくしかない人間の姿を、客観的に視覚的に表現しているのが、球の上を走り続けているねずみの姿である。道化師が、乱雑をきわめた暗い市街をそんな物思いにふけりながら更に歩いて行くと、不意に人だかりのしている明るいショーウィンドーの前にたどりつく。そのショーウィンドーの中には、上から糸でつり下げられているのでもなく、下から棒や台で支えられているのでもなく、一つの球が宙に浮かんでいる。そして、その球の上にはその球とさほど大きさの違いのない一匹の大ねずみが乗っかっている。ところがその球は、そのねずみの意志や決断や選択とかには全く関係なく、球の勝手ないろいろな方向に、かつその球の勝手な速度で、速くなったり遅くなったりして、回転し続けているのである。その上に乗っかっているねずみは、その球から滑り落ちまいとして必死になって、球の回転速度と同じ速度で、そしてその球の回転方向と正確に逆方向へ、走り続けなければならないのである。その球の下には、見るも恐ろしい毒虫や蛇どもがうじゃうじゃ、落ちてくるねずみのごちそうにありつこうとして、毒針をもたげ、口を開けて舌なめずりをしながら待ちかまえているのである。生きるつもりなら、このねずみには、今ある自分の存在とは別の自分の存在を自分の自由な決断で選択することは不可能である。今までもそうであったし、これからもそうなのである。ひょっとしたら、このねずみは我々人間なのかもしれないのだ。このねずみの

寓話は、実に見事に人間に自由は存在しないことを描いている。

では、人間の自由な決断の存在を、人間の精神の自由の存在を固く信じているエンデにとって、このねずみの寓話は何の意味があるのであろうか。エンデは、田村都志夫氏のインタビューに際して次のように言っている。

エンデ …ルドルフ・シュタイナー（の思想）から学んだことの多くは、私にとってきわめて大切なことですし、生に対する私の考えそのものの、決定的な礎石なのですが、しかし、芸術に関しては、その限りではない。シュタイナーの芸術思想は、どうしても私には受け入れることはできないし、今でも間違いだと思っています。なぜかという、ひとことで言うならば、

「暗黒が欠けている」

と言えるからです。

どの芸術であれ、詩でも、絵画でも、楽しく明朗な絵画でさえ、どこか暗黒を持っていなければならない。…そうでなければ、明るさにしても何の値打ちもない。

人智学の絵画をご覧になれば、どれも暗黒が欠けています。そして、そのために奇妙に植物的となり、少しばかり血が欠ける感がある。鋭さもない。<sup>(12)</sup>

とすれば、『鏡の中の鏡』の中のサーカスの道化師の考え、すなわち、自由な決断などは過去にも現在にも未来にも存在しないのだという思想は、エンデの芸術としての文学における暗黒部分なのである。この暗黒の部分の自由があるからこそ、エンデの本音の自由、いわば明の部分の自由は、価値を持ち、鋭さを増し、鮮明に輝いて見えてくるのである。この道化師の考えている「自由は存在しない」という自由は、エンデのいわゆる「<sup>ア</sup>暗」としての自由なのである。

では次に、エンデの言う「<sup>メイ</sup>明」としての自由、つまり本来の意味での自由、ないしは普通の意味での自由が、エンデの文学作品の中でどのように表現されているかを見ていくことにしよう。

なんらかの意味では、あるいはなんらかの程度では、エンデの短篇、長篇を合わせて数多い作品のほとんどすべての作品において、「自由」は表現されている、ないしはその物語の進展の鍵となっている。自由をその作品の第一テーマとして、その作品全篇を通して、自由を追求している作品もあるし、他のテーマを追求しながら、その第一テーマの追求に不可欠な契機として自由が登場し

ていることもある。あるいは、その作品の主人公の年齢によって、そこで問題となる自由の種類もおのずと異なってくる。自由の出現形態も正に自由そのもの、どんな枠組みの中へ入れられることを拒む自由もある、いや、自由というものはそういうものであろうけれども、分析の手掛かりとして次の三つの類型を設けて、それぞれの類型の代表的なものを、エンデの作品の中から探し出していくことにする。

- 一、離脱志向的自由（～からの自由）
- 二、帰属志向的自由（～への自由）
- 三、最終的帰属としての自由（即自的自由）

### Ⅲ. 離脱志向的自由（束縛からの自由）

人間は、自分の欲望と異なるものに対しては、あるいは自分に苦痛を与えるものに対しては、忌避的情動を持つ。自分が持っている理念に反するものと直面した場合にも忌避的な判断を下したり、逃走的行動を取ったりする。自分が持っている欲望や願望や理念と相容れないものが、向こうから自分へ近づいてきて、更には服従を強要するに到った場合は、単に忌避的な感情を持ったり、拒否的な判断を下すだけで、座して動かさず静観しているわけにはゆかなくなる。この場合は、その強制に対して明確に拒否するか、そういう服従を強制するものと闘って相手を消滅させて自己の願望や自己の理念の存在を確保するか、さもなくばとにかくその強制による拘束をまぬがれるために逃走するか、いずれかの行動を取ることになる。ひとことで、束縛からの自由といっても、場合によって、離脱、忌避逃走、拒否、闘争、隔絶等、いろいろな形態で物語られている。

#### 1. 離脱、忌避・逃走としての自由

忌避し逃走することによって忌避すべきものによる束縛をまぬがれようとする主人公の情動や行為は、『モモ』においても『はてしない物語』においても、各々の物語の重要な部分を占めている。

『モモ』においては、その第10章「激しい追跡とのんびりした逃走」で、『はてしない物語』では、真夜中の12時少しすぎに至るまでの出来事を物語っているこの物語の前半において、各々の主人公が逃走する様子がきわめて手に汗にぎるかたちで物語られている。これについては筆者の先行論文で詳しく紹介してあるので<sup>(13)</sup>、本稿では原文を引用して実証的に論証することは差し控え、



要点を指摘するにとどめたい。

まず、『モモ』を見てみよう。主人公のモモは、愛を基本とする質的価値の具現者として天から降ってきたように、いきなりローマ郊外の屋外円形劇場の廃墟に住みつく。モモは、10歳くらいの少女であった。モモの持っている「聞く能力」は、不思議な能力であった。モモに話を聞いてもらうだけで、ある人は自分の心の中に友愛の徳を覚醒させ、またある人はあすへの希望を心の中に呼び起こし、またある人は自分の仕事に対する信念と喜びを強め、またある人は創造的な空想力をはばたかせるのである。こうしてモモのまわりには一種の理想郷が生まれ、徐々に広がっていったのである。心の充実した生活を営んでいるそんな社会の中に、ある日、これは今度はまるで地から湧き出たように灰色の男が姿を現し、徐々にその数を増していったのである。灰色の男は、現代のテクノロジー社会の量的価値観の権化で、彼らの職業は、彼らが秘密に経営する時間貯蓄銀行への時間の貯蓄の勧誘であった。彼らのきわだった能力は、巧みな話術であった。彼らは、その巧みな話術によって、時間を節約するよう巷の人々に働きかけ、そしてその節約した時間を彼らが営んでいる時間貯蓄銀行に預ける契約をとりつけるのである。巷の人々は、いともたやすく言葉たくみな灰色の男たちの口車に乗せられて、時間を節約し、その時間を彼らの時間節約銀行に預ける契約をしてしまうのである。その契約をした人々は、他人に奉仕する時間をむだな時間としてはぶいて、その時間も仕事に充てるようになる。子供たちは空想力豊かに遊ぶことを禁じられ、その時間も勉強するよう強制されるようになる。時間をかけて良心的によい仕事をすることを信念としていた名人気質の職人たちは、仕事の過程を合理化し、ひたすら工期の短縮に努め、手抜きしてでも多くの成果をあげようとするようになる。こうして彼らはひたすらたくさん仕事をして、たくさんお金をもらうことだけを重んずる仕事ロボットと化し、彼らの生活からは愛も信念も希望も喜びも消えてゆく。巷にはそんな人々がどんどん増えてきたのである。ある日、こともあろうにモモの所にまで、BLW / 553 / Cと称する灰色の男がやってきて、時間の節約と貯蓄の勧誘を始めたのである。灰色の男、BLW / 553 / Cがモモを説得することは不可能であった。それどころかこの灰色の男は、モモの不思議な聞く力のとりこになって、自分たちの秘密を全部自分から進んで白状してしまったのである。その灰色の男の告白によると、灰色の男たちの生存の糧は人々が節約して彼らの銀行に預けた時間のみである。従って、人々から預かった時間は灰色の男たちの存在のために全部消費されてしまうので、預けた人々に返済されることは

絶対にない、自分たちが生存し、仲間の数を増やしてゆくためには、人々から更に多くの時間を騙し取らなければならない、と言うのである。モモにこの秘密を漏らしてしまったこのBLW / 553 / Cは、ただちに灰色の男たちの最高法廷で裁判にかけられ、最重要機密漏洩の罪で、即座に死刑に処せられる。それと同時に、モモを捕らえよ、という総動員令が発せられたのである。それは真夜中の12時頃であった。その時モモは、郊外の屋外の円形劇場の廃墟で、なぜか眠れない夜をすごしていた。その時、足に何かが触れる気配を感じたのである。ふと見ると、それは一匹のカメであった。その名は、カシオペア、30分先までのことなら何でも見通すことのできる不思議なカメであった。このカメは、人間の時間の管理者マイスター・ホラから、モモを灰色の男たちから救い出すために派遣されたカメであった。モモはカシオペアの後について、円形劇場の廃墟の住処を抜け出してゆく。ここから灰色の男たちの必死のはげしい捜索と追跡、それに対するモモののんびりとした、しかし手に汗にぎる不思議な逃走が繰り広げられる。モモは結局、カシオペアの道案内によって灰色の男たちの追跡を振り切って、この世ならぬ「どこにもない館」の主マイスター・ホラのもとへ逃げ込んだのである。こうしてモモは、灰色の男たちの束縛からの自由を確保したのである。

『モモ』以上の長篇『はてしない物語』の前半分も、主人公バスチアンの逃走的物語である。バスチアンは、10歳くらいの少年であるが、年齢のわりには背が低く、エックス脚で顔色の冴えない、見栄えのしない少年であった。肥満体でのろま、体力も気力も弱く、おまけに落第したことがある程学業成績の振るわない、ひとことで言って落ちこぼれの少年であった。彼は父親と二人暮らしであったが、2人の間には温かみのある愛情の交流はなく、互いに相手の存在を疎んじ合っているかのような心の触れ合いに乏しい冷え冷えとした家庭であった。バスチアンは、そんな父と家庭に恐怖と苦痛を感じていた。学校では学級友だちからいじめにあい、心身の苦痛と恐怖に苦しんでいた。学校生活もまたバスチアンにとっては終身禁固刑に服役しているかのように感じられていた。

ある雨の降りしきる朝、バスチアンが登校して行くと、校門の所でふだんからバスチアンをいじめていた恐ろしい級友たちが待ち伏せしていたのである。ここから、バスチアンの逃走が始まるのである。バスチアンは彼らにつかまらないように、走って逃げ出す。そして学校の近くのコレアンダー古書店の中へ駆け込んだのである。そこで彼は『はてしない物語』という標題の本を見つけ、抗いがたい魅力にとりつかれて、その本を盗んで店から出たのである。バスチ

アンは走りながら思った、盗みを働いてしまった今では、自分はもう父親の所へは戻れない、と。こうして彼は父親からも逃走したのである。ハアハア息を切らせて走っているうちに、気づいてみると自分の学校の前にいた。遅刻であった。校庭にも廊下にも人気はなかった。自分の教室の入口の前に立った。けれども、今さらこの監獄のような教室の中へ入っていく気にはなれなかった。その時、彼は思いついた、僕は初めからこの教室の中にはいなかったのだ、ということにしよう。こうして彼は自分の教室の中からも自分の存在そのものを脱出させたのである。彼はもう、どこへ行ってもいいよるべのない存在だった。でも、どこへ行こうか？ この時、バスチアンはひらめいた。そうだ、この学校の屋根裏の物置部屋へ行こう。こうして彼は誰にも気づかれずに学校の物置部屋の中へ忍び込んで、中から鍵をかけ、更に念を入れて中側からかんぬきまでかけてしまったのである。それはその日の朝の9時少し前のことであった。そこで彼は先程盗んできた『はてしない物語』という本を取り出して、読み始めたのである。その物語は女王「おさな心の君」の君臨するファンタージェン国の物語であった。その物語を読み耽っているうちに、バスチアンの心は徐々にその物語の中へ入って行く。その日の真夜中の12時すぎ、バスチアンはついに女王「おさな心の君」の君臨しているファンタージェン国へ行ってしまったのである。こうしてバスチアンは、恐怖と苦痛に満ち満ちている現実の世界から身も心もファンタージェン国という異界へ逃避してしまったのである。こうしてバスチアンは、現実世界の恐怖と苦痛の束縛から逃れたのである。つまり一種の離脱的自由を実現したのである。

## 2. 拒否という形態の自由

この形態の自由は『モモ』の後半において、灰色の男たちに対するモモの態度によって実現されている。逃走という形態の自由のところでも述べたように、モモは灰色の男たちの追跡を振り切って、マイスター・ホラの館へ逃れていった。そこでモモは、人間の時間が大宇宙のどこをどんな形をとって流れていくのかを全部見せてもらったのである。死んだ人間の時間は、大宇宙の一番高い所へ還流して行き、そこで黄金の光・大宇宙の音楽となる。その黄金の光は黄金のドームの下の池に差し込むと、筆舌を絶する程美しい時間の花となって、その池の水の中から生え出てくるのである。その時間の花はマイスター・ホラの「どこにもない館」に保管されて、あらかじめ定められている人々へ配送されるのである。人間に配送された時間の花は、人間に受け取られるとその人の

日常の生活時間となる。モモは、この美しい時間の秘密を人間界の友人たちに語って聞かせてやりたいと言う。しかし、それができるようになるためには、1年間の時間をかけて機の熟するのを待たなければならないと、マイスター・ホラは言う。こうしてモモは、マイスター・ホラの館で1年間の眠りについたのである。モモが眠りから覚めてみると、そこはもとのローマ郊外の屋外円形劇場の廃墟であった。しかし、人間達の世界は1年前とは全然違っていった。第一、いくら待っても、あんなに親しかった友だちのうちの一人として、訪ねて来る者はいないのである。そこでモモは、自分から最も親しかった友人たちを訪ねて行った。ところが今では、ニノもニコラもジジさえも、落ち着いてモモと語り合う暇もなく、仕事ロボットのように働きづめである。子供たちは「子供の家」に収容され、強制的に勉強させられるだけで、昔のように自由に遊ぶゆとりは与えられていなかった。道路掃除のベッポは行方不明であった。みんな灰色の男たちに心を征服されてしまっていたのである。こんな時、灰色の男たちはまたもやモモの前に現れて今夜とりひきをしよう、と持ちかけてきたのである。はじめは恐ろしいばかりであった。灰色の男たちから身を隠したい一心で、街の人混みの中に紛れ込んであてもなく歩きまわっているうちに、とうとう夜になった。あとは、どこをどう歩いたのか、モモにもわからない。心身の疲労が極度に達した時、不思議にもモモの度胸が定まったのである。今、友人たちを救い出せるのは自分以外には誰もいない、ここで逃げてはいけない、否、むしろどうしても灰色の男たちに会わなくてはならない、という気になったのである。モモは人気の全然ない広い空き地の真ん中に、一人、立っていた。遠くから真夜中の時を知らせる鐘の音が聞こえてきた。その時、その空き地に通じる四方の道路から自動車のライトが迫ってきた。たちまち自動車の数はどんどん増え、バンパーとバンパーが触れ合う程密集して、モモを中心に置いて、モモを遠巻きにしてしまったのである。モモは、どこを向いても自動車のヘッドライトに真正面から照らし出され、目がくらんで何も見えない。しかし、その背後の闇の中には、無数の灰色の男たちがうごめいている気配が伝わってくる。闇の中から灰色の男たちは言う。もう俺たちは、人間一人ひとりから、一分、一時間とこまごまと時間を奪い取る仕事にはうんざりした。人間の時間をまるごと手に入れたい。そのために、マイスター・ホラと会いたいのだ。マイスター・ホラの館へ案内しろ、案内してくれれば、おまえにおまえの友人を全員返してやる、と言うのである。モモは、灰色の男たちの冷気にさらされて気を失いかけながらも気力をふりしぼって答える。

「たとえば案内することができるとしても、私は案内なんかしないわ。」<sup>(14)</sup>  
誠に勇気ある決断である。拒絶も自由の一形態なのである。

### 3. 闘争という形態の自由

モモと灰色の男たちとの決戦は、このモモの包囲事件に続いて起きる。

またしてもモモを屈服させることができなかつた灰色の男たちは、戦術を変えてモモに隠れてモモを見張り、ひそかに尾行することにしたのである。この戦術は図に当たった。灰色の男たちが表向き包囲を解いて退散したかに見せかけると、再びカシオペアがモモの前に現れ、今夜モモはマイスター・ホラの館へ行くことになっている、と言うのである。今回は灰色の男たちの姿におびえることもなく夜の市街路をぬけて、例の「一度もない小路」にたどり着いたのである。この小路を進むためにモモが後ろ向きになると、驚いたことに何と彼女の後ろには灰色の男たちの大群が後をつけて来ていたのである。モモとカシオペアはマイスター・ホラの館へ入ることはできるけれども、灰色の男たちは本質的にマイスター・ホラの館に入ることはできないのである。しかし、今度こそは灰色の男たちはマイスター・ホラの館のありかだけはつきとめることができたのである。今度はおびたしい数の灰色の男たちはマイスター・ホラの館を幾重にも包囲して、離れようとしなない。彼らは命を支えるために盗んだ時間の花の葉巻を絶えずふかしているのです、彼らの葉巻から立ちのぼる煙で、マイスター・ホラの館はすっぽりと包まれてしまう。こうなると、マイスター・ホラが人々に配る時間もこの煙に毒されて、それをもらった人々はことごとく「致命的退屈症」<sup>(15)</sup>にかかってしまう、というのだ。ここでついに、マイスター・ホラは灰色の男たちの撲滅を決意する。マイスター・ホラが立てた戦略を実行できるのはモモしかいないのである。ホラの戦略によると、彼は1時間だけしか咲いていない一輪の時間の花をモモにだけ与え、他の人々に対する時間の供給は一切停止して、ホラ自身は眠りにつく、というのである。モモは、この一時間の中に人間界へ行って、まず、灰色の男たちが人々から盗み取ってきた時間を蓄えておく貯蔵庫のあり場所を探し出さなければならない。次に、その貯蔵庫の扉を閉めることによって灰色の男たちの生存の糧となっている死んだ時間の花の葉巻の補給路を断ち、灰色の男たちを1人残らず消滅に到らしめなければならない。更にそれから、再びその時間の貯蔵庫の扉を開けて、灰色の男たちによって盗まれた時間を全部解放して、元々の持ち主へ返してやらなければならない。そうすればマイスター・ホラは再び目を覚まして、人々に時間の

花を供給する仕事を再び開始する。これだけの仕事をたった一時間で、しかもモモ1人で完全に全部やり遂げなければならない、というのである。これに失敗すると、マイスター・ホラは永遠に眠りについたまま、二度と目覚めることはない。そうなれば人間に対する時間の供給も永遠に停止してしまう。宇宙の時間の循環は停止して、すべては永遠に死に絶えてしまうというのである。マイスター・ホラはこう説明したうえで、モモにこの大役を引き受けてくれるか、とたずねる。モモは決意して、この仕事を引き受ける。モモと灰色の男たちとの戦いは、『モモ』の第20章で展開されている。灰色の男たちの束縛からの自由は、最後的には、戦闘によって勝ち取られたのである。

#### 4. 隔 絶

この形態の自由の好例は、『自由の牢獄』の冒頭の短篇「遠い旅路の目的地」に見ることができる。

この物語の主人公はイギリスの貴族、シ rilル・アバーコンビィである。シ rilルの父バジル・アバーコンビィ卿は、外交官としてヴィクトリア女王陛下に仕えていた。外交官としての父の仕事は特別任務であったため、2カ月と同一の都市にとどまることはなく、いつも大都市から大都市への旅の連続であった。シ rilルは生まれてからこの方、常に父と共に旅をしていたため、8歳くらいになった頃にはヨーロッパ大陸の大ホテルなら全部知っていたし、近東の大ホテルも大部分知っていた。シ rilルの母レディ・オリヴィアは、シ rilルが生まれてまだ2、3カ月にもならない頃、父の言うには、辻バイオリン弾きと駆け落ちしたのだそうである。それ故、シ rilルは母の面影はおろか母親の愛情を知らないで育ったのである。旅に明け暮れるシ rilルの養育を務めていたのは、家庭教師として雇われていた未婚の中年女性ミス・ツイッグルと、卿の執事のヘンリー、それから卿の個人秘書として雇われていた若者アシュリー、この3人であった。

シ rilルは、その顔立ちからして人の好感を呼ぶような子供ではなかった。頭髪は麦わら色、目は出目で生気がなく、口唇は不満げで厚ぼったく、あごは異常に長かった。それに何といたっても子供として奇妙だったのは、シ rilルの表情には感情の動きというものが全く見られないということだった。では、彼の性格はどうだったのか。

これは勿論誇張ではあるが、シ rilルの性格には確かに、彼と関係がある者なら誰もが一樣に感じ、かつ一樣に驚く、何かがあった。それは、彼の極端な意志力であった。<sup>(16)</sup>

その後もずうーっと、父と共に旅また旅の生活の中でシрилは大きくなっていった。不思議というべきか、当然というべきか、シрил少年には郷愁の感情は全くなかった。

シрилが12歳になって間もない頃、イギリスの故郷で一人暮らしをしていた母オリヴィアが死亡したという電報が届いた。父と息子は即刻南エセックスへ発ち、葬儀に立ち合った。シрилが彼の故郷である英国の地を踏んだのはこれが初めてであった。当然、シрилには故郷に帰る喜びなどは全くなかった。葬儀の後、シрилは父に連れられて、アバーコムビー族の居城クレイストーン・マナー城へ行った。その城は国際級ホテルと比べれば生活の快適さなど皆無に等しく、シрилはこの城に親しみを感じるどころか、落胆を感じただけであった。

不貞の妻が亡くなった今では、息子シрилを憎き不貞の妻から切り離すために旅から旅へと絶えず連れて歩く必要もなくなったので、父は彼を英国の名門校Eカレッジへ入学させた。シрилは、優等生でEカレッジを卒業した後、上流階級の子弟にふさわしくO大学に入学して哲学と歴史学を学び始めた。それから幾学期も経っていない頃、21歳の誕生日の直後、父バジル・アバーコムビー卿が、狐狩りの途中で不運な事故のため死亡してしまったのである。こうして、シрил・アバーコムビーは父の爵位と父の遺産すべてのみならず、母オリヴィア家の総遺産をもあわせて相続することになったのである。ところがシрилは、父の葬儀の一切をアバーコムビー家の顧問弁護士のソーン氏にまかせ、父の葬儀には顔も出さずに早々に放浪の旅に出てしまったのである。それだけではなく、葬儀の話も上の空で、シрилはソーン氏に彼が相続した遺産すべてを直ちに売却するよう命じたのである。彼はイギリス国民からは、恥知らずの売国奴と避難された。こうして若きシрил・アバーコムビーは、世界の大富豪100人のうちの1人に数えられる大富豪となったのである。

その後10年間、シрилは、ヨーロッパのみならず、文字通り世界中、定住を知らぬ放浪の日々を送り続けた。その間、彼の旅のお供をしたのは、彼が香港でアヘンのシンジケートのボスから買い取った王<sup>ワン</sup>という名の男1人であった。今では彼の名は彼の持ち前の無作法が災いして、社交界からはほとんど忘れられていた。否、思い出す人がいたとしても、敬遠した。

しかし、シрилがたまたまフランクフルトに滞在していた時、彼に運命の転機が訪れたのである。彼は、成り上がり者のフランクフルトの商工業顧問官ヤーコブ・フォン・エルシュルの主催する「芸術と音楽の友が集う会」へ招待され

たのである。その会の席上、顧問官は来客をもてなすために、彼らを彼の画廊に案内した。シリルは「遠い旅路の目的地」と題する1枚の絵の前で、自他を忘れて茫然として立ちつくし、涙を流して、見つめていた。

描かれているのは岩石の砂漠であった。漆黒の夜空には月も星も見あたらないにもかかわらず、こうこうたる月光に照らされていた。前景には広々とした谷が描かれていて、その谷は背景の奇怪な山並みに遮られていた。そしてその谷の中央には、無数の洞穴や裂け目だらけのキノコのような形をした巨大な岩柱がそそり立っていた。このガラスのような岩塊には上の方へ登る小道はなかった。はしごもなかったし、階段もなかった。谷底と頂上の台地とを結ぶエレベーターといったものは何一つなかった。そして、その頂上の台地には、無数の小さな塔や小さな円屋根、無数の出窓やバルコニーなどを備えた乳白色っぽいす紅色に輝く半透明の月長石でできている夢のような宮殿がそそり立っていた。…その宮殿の窓という窓はすべて煌々と明るく輝き、その宮殿の内部ではさんさんたる燈火の下で、にぎにぎしく宴会が催されているかのようなようであった。しかし、見える人影は1人きりであった。その人影は、閉めきられたままになっているこの宮殿の正面入口のすぐ上にある窓枠の中に立っていた。その人影は、歓迎の意をあらわすためか、それとも拒絶の意をあらわすためか、片手をあげていた。<sup>(17)</sup>

シリルがこの絵の前に立ちつくして涙を流しているのに気づいたヤーコブ・フォン・エルシュルの娘イゾルデ嬢は、横からやさしく声をかける。

「でも——どうなさいましたの、閣下？ ——涙が…」<sup>(18)</sup>

この「遠い旅路の目的地」と題する1枚の絵とシリルとの出会いは、シリルにとって運命の出会いとなり、同時に、この絵の前でのシリルとイゾルデとの出会いは、イゾルデにとっても運命の出会いとなったのである。イゾルデはこの瞬間、シリルは天から落ちた天使であり、ルシファーのように孤独の万年氷河に閉じ込められ、女の愛の力で救い出されるのを待っているかわそうな人なのだ、見抜いたのである。そして、このかわいそうな人を救い出すことができるのは、たとえどんなに大きな犠牲を伴うことになろうとも、自分をおいて他にはいない、と決意したのである。

他方、シリルはこの絵を見た瞬間、彼の胸の内に長い間眠っていた持ち前の強烈な意志力が目を覚まし、その彼の意志はいかなる代償を払ってでもこの絵を手に入れる、という1点に目的を定めたのである。

まずシリルは、フォン・エルシュル氏に手紙をしたため、「遠い旅路の目的地」



という絵の購入を申し入れた。その申し入れ方は、シ ril 流の礼を失した命令口調のものだった。その非礼に憤慨したフォン・エルシュル氏は、いかなる高値で申し込まれようとも、シ ril なんかにはこの絵はおろかいかなる絵たりとも渡すまいと決心した。それ故、シ ril が何度、法外な高値をつけて購入を申し込んでも、返事さえこなくなった。シ ril はやむなく他の手を考えざるを得なくなった。シ ril は、もはや手段の善し悪しを問わず、あの手この手を考えた。しかし、どれも現実には到らなかった。

ことは、シ ril の予期せぬところから動き出したのである。シ ril が再びフランクフルトのホテル・ツーム・レーマーに戻ってみると一通の手紙が届いていたのである。それはイゾルデ嬢からの恋文であった。それから二人は人目を忍んで逢瀬を重ねた。やがてイゾルデは、乙女の愛の証の中でも最も大切なものをシ ril に捧げた。更にシ ril は、イゾルデに家の鍵を全部持って来るよう要求したのである。それだけがシ ril がイゾルデに近づいた唯一の目的だった。その夜が、シ ril とイゾルデの逢引きの最後の夜となった。

その明るる日にはシ ril はもうナポリにいた。シ ril は、イゾルデが持って来た鍵のろう型から作った合い鍵を美術品泥棒の名人に渡して、フォン・エルシュル邸から、あの「遠い旅路の目的地」という絵を盗んで持って来てくれと、依頼したのである。その盗みは成功した。シ ril はついに、あの「遠い旅路の目的地」という絵を手に入れたのである。但し、この盗みには計算外の出来事を伴っていた。その名人が言うには、不運にも盗みの現場でフォン・エルシュル氏に見つかり、殺す気はなかったけれども彼を殺す結果になってしまった。その数日後、イゾルデはマイン川に身を投げて自殺した。検死の結果、彼女のお腹の中には子供が宿っていた。更にその後、彼女の母親は精神病院に入って、今も入院中である、というのである。それを聞いてもシ ril は、悲しみどころか、ほとんど何の感情さえ示さなかった。

その後、シ ril は放浪を続けながら一人ひそかに、その絵を毎日のように見つめていた。シ ril は 45 歳になっていた。シ ril がヴェネツィアに滞在していた時のことであった。彼はある不思議な老人の店に迷い込んでしまった。その老人が言うには、この地球上には人間がまだ創っていない空白が存在するというのである。そして、地球儀を回して、好きな空白地点を探して選べという。シ ril の目にとまった所は、ヒンドウークシュ山脈の真っ只中であつた。この店の入口のドアの上に書いてあるヘブライ文字の意味をたずねると、それは「さがせ、さらば見出すであろう」<sup>(19)</sup> という意味だというのである。これが、シ ril

の運命を最終的に決定するものとなった。シリルは「遠い旅路の目的地」こそは、このヒンドークシュ山脈の真っ只中の空白地の未来の記憶<sup>(20)</sup>を描いたものに違いない、と確信したのである。そして自分の人生の最終的目的地はここ、と決めたのである。

それから半年間、シリル・アバーコムビィは、ヒンドークシュ探検の入念な準備に没頭した。彼の探検を噂で聞いて多くの人々が彼のところへやってきた。彼はそれらの人々と面接して、その中から3人の随行者を選んだ。登山技術の第一人者トールヴァルト、インド、パキスタン、モンゴルの言語、20種あまりの方言を自由に使いこなすブロンスキー教授、それと画家のメルケル。この3人と王、そして自分。この5人の一行はまずハイデラバードへ向かって旅立った。更に、イスラマバードへ。ここでは3カ月をかけて、16人の人夫やシェルパを雇い、24頭のラバにテントや装備や食料を積んで、いよいよ探検へと出発した。途中、狼の群に襲われて、7人の人夫と13頭のラバを失った。やっとチラスという名の、たった数軒からなる山岳村落にたどりついた。ここで画家のメルケルは亡くなった。隊員は全員、シリルに探検の中止を進言した。しかしシリルはここで数日休息した後、出発を命じた。ティリッヒ・ミールの方角へ旅を進めていた途中、雪崩に飲み込まれて3人の人夫と5頭のラバを失った。その夜、生き残ったシェルパと人夫は密かに話し合い、予告もせず、ラバ3頭を残して、全員逃げ帰ってしまった。その3日後、4人は屏風岩にさしかかった。シリルは、ここでラバを全部射殺した。この屏風岩を登る途中で、ブロンスキーが滑落死し、トールヴァルトもその道連れになった。岩壁を横断しきると、広々とした雪の斜面が広がっていた。雪は深く、全身が沈んでしまう程だった。ここで、王はついに力つきて死んでしまった。ついに、シリルに付き従う者は、一人もいなくなってしまったのである。

それから、どれだけ夜が明け、日が暮れたか、シリルでさえ忘れてしまった。ある日、シリルは輪のように連なる山並みの尾根にたどりつき、山間の広々とした盆地を見下ろしていた。その盆地には雪はなく、その中央には巨大な岩柱がそそり立っていた。そしてその岩柱の頂上の台地には、ほのかな光に包まれた宮殿がそそり立っていたのである。今、シリルの目前にそそり立っているこの宮殿は、あの「遠い旅路の目的地」と題する絵に描かれていた宮殿と全く同じ宮殿であった。シリルはついに、自分の「空白地点」を発見したのである。シリルは尾根から盆地へ降り、岩柱のふもとにたどりついた。今やシリルには身体感覚は全くなくなっていた。しかしここから、1センチ、また1センチと、

シ ril の最後のあり得ない登頂が始まったのである。

それから 72 年後のことであった。数人の貴金石商人が商隊を組んでチトラールからサラッド峠を越え、コロークへ出て、更に西方のフェイザバードへ向かっていた。途中、険しい高山に差し掛かったところで予定のコースからそれてしまった。余儀なく回り道をしていた途中、奥地の谷間でほぼ円形の盆地を発見した。その中央には、きのこの形をした巨大な岩柱がそびえ立っていた。その頂上には、たくさんの塔をそなえた虹色に輝く月長石でできている宮殿を見つけたのである。もう日も暮れていたのもので輪状に連なる山並みの上で夜営のテントを張らざるを得なかったというのである。彼らの話によると、

その夜は夜通し、その宮殿の窓という窓からは、その内部でにぎにぎしく宴会が行われているかのように、煌々とあかりが漏れていた。しかし、彼らに見えた人影はたった一つきりで、それは閉ざされた入口のドアの上の窓枠の中に立っているたった一人の人の黒いシルエットだけであった。その人影は、歓迎の意を表すためなのか、それとも拒絶の意を表すためなのか、片手を挙げていた、というのである。<sup>(21)</sup>

これらの商人たちが見たのは、シ ril ・アバーコムビィのシルエットだったということにしよう。シ ril は、父をも母をも捨てた。先祖から受け継いだ財産も爵位も捨てた。イゾルデにはらませた自分の子種も、母子もろとも死に到らしめた。そして最後まで彼に付き従ってきた人々をも、王をさえも、全員死に到らしめた。シ ril は、三世の一切を捨てたのである。つまり、三世の一切の束縛から完全に脱出し、自由になったのである。しかもシ ril が到達した所は、全人到達不可能な隔絶された地上の「空虚な空白点」だったのである。彼はいったい何の意志を表す目的で片手を挙げていたのだろうか、だって？ 「歓迎の意を表すためなのか、それとも拒絶の意を表すためなのか」だって？ 無論、これは拒絶の意思表示のポーズなのである。その証拠に、彼の宮殿の入口のドアは閉めきられているではないか。ここではシ ril を束縛する人は一人もいないし、彼を束縛するこの世のしがらみは、何一つ存在しない。シ ril ・アバーコムビィが到達した自由は、一種の最も純粋な自由の一つである。しかし、これは全身の血も凍るような自由である。

#### IV. 帰属志向的自由

しかし、通常人間は、シ ril ・アバーコムビィが到達したような、他人との完全な隔絶状態では、つまり完全な社会的孤立状態では生きられるものではな

い。そして、完全な精神的孤独の中でも生きられるものではない。そういう状態の中では少なくとも満ち足りた気持で安定した精神状態で生きられるものではない。人間は孤独に苦しみ、耐えられないものである。また人間は、無でもない空でもない全く無記の「空虚な空白」(weiß und leer<sup>(22)</sup>) 地点では、しかも、最終的な目的地として到達された空虚な空白地点では、充実して生きることはできないはずだ。ここには、もはや生きる目標も、生きる拠り所としての価値も空虚で空白だからだ。人間は本能的な欲求を充足するだけで満足するものではない。いや、ここには、その本能的欲求を充足する術さえないはずだ。他の動物と違って人間は、更にその上、生きる意味づけ・精神的な価値づけを要求するものなのである。そしてこの精神的な価値づけが、生きる意志に方向を与えるものなのである。こうして人間は、自由から自由へ、はてしない放浪の旅へ旅立つのである。

エーリッヒ・フロムは次のように述べている。

…すなわち、自己を自然や他人とは違うものとして意識することによって、あるいは、ぼんやりとはあれ、死や病や老衰を意識することによって、宇宙と比較してそしてまた「自分」でないものすべてと比較して、自分の無意味さや小ささを必然的に感じざるを得ない。そこで彼は、何かに帰属しない限り、彼の生活が何らかの意味や方向を持っていない限り、彼は自分を塵の一粒のように感じ、自分の個人としての無意味さに圧倒されることになるであろう。<sup>(23)</sup>

そこで人間は、孤立状態から抜け出そうとあがき、自分の生活に意味を与えようともがくものなのである。しかし、こうして人間は、再び自由を喪失していく。人間や自然との原初的な一体性からの脱出という意味の自由を多く持てば多く持つ程、より完全に一個人になりきればなりきる程、人間には次の二つの道のうちいずれか一つの道しか残されていないことになるのである。すなわち、自発的に愛することによって世界と自分自身を結合したり、生産的な仕事をするによって世界と自分とを結合する道に行くか、さもなければ、自分の自由を破壊する世界と自分を結合することによって安心感を探し求めたり、個としての自我の統一性を破壊する世界と自分を結合する道をたどるか、この二つに一つしか残されていないのである。<sup>(24)</sup>

というわけで、自由を求めて従来の人々との絆を断ち切ったり、旧来の生活原理を否定したりしても、そこに待っているものは耐えがたい孤独地獄や無意味地獄だけなのである。時として、この自由な孤独の苦痛は、束縛される不自

由の苦痛よりも、もっと大きいこともあるものなのである。人間は通常、この孤独には耐えられない。当然エンデの作品の中でも、自由の実現を追求しながらこの孤独地獄の中に陥って苦しむ姿は、多々出現している。『はてしない物語』の主人公バスチアンも、彼の長い旅路のあちこちでこの孤独に苦しんでいる。バスチアンは、授かりもしていないファンタージェン国の帝王の玉座につこうとして、即位式を強行する。しかしその即位式の最中、親友アトレユが反乱を起こし、軍勢を率いてせめのぼってくる。この戦闘で玉座は打ち砕かれ、エルフェンバイン塔はモクレン宮もろとも炎につつまれ灰塵に帰する。逆上したバスチアンは、アトレユを追撃しようとしてやみくもに闇の中へ突入していく。この時にはすでに、バスチアンの後続く部下は一人もいない。その翌朝、バスチアンは「もと帝王たちの都」にたどり着き、そこで初めてアトレユの忠告の意味を理解し、本来の自分の世界へ帰るための出口を求めて、「もと帝王たちの都」を脱出する。天涯孤独となって荒野をさすらいながらバスチアンは焼け付くような孤独地獄に苦しむ。

幾日も、幾夜も、彼は孤独にさまよい続けた。そうこうしているうちにその孤独に耐えかねて彼は願った。もうなんでもいいから仲間に入れて欲しい、どんなグループでもいいから受け入れて欲しい、君主としてでなくてもいい、勝利者としてでなくてもいい、あるいはおおよそなか特別な者としてなんかでなくてもいい、そういう者としてではなく、他の人々と同じただの人としてでいいから受け入れて欲しい、一番小さな者としてでもいい、最もとるにたりない者としてでもいい、けれどもそれに所属しているということが自明の理で、その仲間の一員になりきっている者として、どんなグループにでもいいからとにかくグループの中に受け入れて欲しい、と願った。<sup>(25)</sup>

自分が所属していたグループの中から放り出された者が味わう孤独の苦しみは、『自由の牢獄』の中の「ミスライムのカタコンベ」の中でも述べられている。ミスライムのカタコンベは、いわば一つの宇宙なのである。そのカタコンベ系の宇宙の住人は、「影の民」と呼ばれている。影の民は、このカタコンベ系の宇宙の外に出ることはそもそも不可能なことであるから、自分たちの宇宙の外の世界は知るよしもない。彼らを操っているのは、カタコンベ系宇宙の法則とも言うべき「長」と呼ばれているベヒモート<sup>おさ</sup>という名の大司令官の声である。大司令官の声は必然であり、このカタコンベ系宇宙に遍在している。

ところがある夜、影の民の一人イヴリィが、イヴリィ一人だけが、眠りの中である記憶に目覚めてしまったのである。その覚醒の中で、イヴリィはカタコンベの岩壁にうがたれた窓を見つけ、そしてその窓を通してカタコンベ系の外の世界を見てしまったのである。元来、カタコンベには窓は一つもない。そこでイヴリィは、壁に窓を描けば、その窓を通してカタコンベ系宇宙の外の世界を見ることができるのではないかという希望に駆りたてられて、独裁者ベヒモートの「眠れ」という命令にさからって、夜な夜な一人ひそかにカタコンベの岩の壁にチョークで窓を描き続けたのである。勿論、それによって外の世界を見ることはできなかつた。それでもイヴリィはベヒモートの命令にさからって窓を描き続けた。ついにイヴリィはベヒモートの怒りにふれて影の民としての存在の剥奪を宣告される。

おまえはもはや影の民には属していないのだ。今からは、おまえはもはや何<sup>なに</sup>でもない。(26)

それからというもの、イヴリィにはそれ以後長い間、大司令官の声は聞こえなくなつた。イヴリィの食糧は用意されてはいなかつた。きのうまでのイヴリィのベッドには全然知らぬ影の民が眠っているようになった。それどころか、イヴリィがどう叫んでも、何をしても、影の民の誰一人として、イヴリィの存在に気づく者はいなくなつたのである。

いったい自分は何をすればいいのか。彼を指図する声はもう聞こえないのだから、彼は自分で自分のやる仕事をきめ、自分で目標を定めなければならなかつた。彼は途方に暮れた。彼がその力を身につけるまでには、長い時間がかかつた。そんなことは初めてのことだったので、まず最初に彼が苦しまなければならなかつたのは、彼の孤独感であつた。まるで、目には見えない、しかし通り抜けることのできない、空間に隔てられているかのように、彼は、他の影の民と完全に隔てられていた。彼ははじめて大きな悲しみを味わつた。(27)

というわけで、人間はこの孤独であることの苦しみと悲しみに耐えかねて、他者への帰属を願望したり、他の新しい価値に帰属することを願つたりして、新たな動きを起こすのである。

本稿では、人間の精神の自由を論題としているので、主として小脳がつかさどっているパブロフの犬の条件反射的な動きや、純粹に本能的な行動は論外としよう。大脳皮質の関与する人間特有の行動の場合、その行動は意志決定により方向づけられる。更にその意志決定は、愛憎・好悪などの情動によって方向

づけられる場合もあるし、真偽の判断・論証能力としての理性によって方向づけられる場合もあるし、エンデ特有の考え方であるが、神の創造力と共通な直観によって方向づけられる場合もある。結局は、人間の行動は、精神のどの能力によって方向づけられているかに従ってその人の実現する自由も特徴づけられることになる。

## 1. 情動的帰属志向としての自由

情動は愛と憎の二つに大別される。憎悪または愛の欠如によって方向づけられた他者との帰属関係は、更に二つに分けられる。その一つは、他者を自己に従わせる方向で自他の帰属関係が構築される。これの極端な場合はサディスティックな帰属関係になる。もう一つは、自ら進んで自己を他者に従属させる方向で自他の帰属関係が構築される。これの極端な場合は、マゾヒスティックな帰属関係になる。エーリッヒ・フロムによれば、サディスティックな人間関係もマゾヒスティックな人間関係も、愛する能力の欠如という点では共通しているのだと言う。

### (1) 愛に方向づけられた帰属志向

愛に方向づけられた人と人との帰属関係は、エンデが人間の最も理想的な人間関係と見なしていたものであることは、まず間違いはないであろう。『ジム・クノップと荒くれ13』の主人公ジムの基本的性格は愛である。昔、ミュレン王子（実はこれがジムの本当の名前であり、本当の身分である）が「荒くれ13」と自称する海賊たちによって荒れ狂う海から拾い上げられて救われた時、ミュレン王子の肌身にそえられていた黄金の筒の中に入れてあった羊皮紙には、次の文言が書かれてあったのである。

この子を救い、愛をもって受け入れた者には、この子はいつかその者の善意に対して王者の慈愛をもって報いるであろう。…<sup>(28)</sup>

他人から受けた善意に対しては、王者としてふさわしい仕方で報いる、愛には愛をもって報いる、というのがジムの性格の本質である。ジム、すなわち後のミュレン王によって統治されて栄えたジムバラ国は、ジムの愛によって結ばれた人々の国であった。ジムの行動は常に愛によって方向づけられていたのである。

『モモ』の主人公モモの性格の本質も愛であった。巷の人々を征服した灰色の男たちは、ついにモモの前にまで姿を現したのである。モモを説得しようとしてモモの前に姿を現した灰色の男「ナンバー BLW / 553 / C」はまず手始めに、通常の子供ならわけもなく誘惑することができる美しい人形で気を引こ

うとする。普通の子供とちがってさっぱりその手にのってこないモモに対して、BLW / 553 / Cは、むきになって打算的で合理的な理屈をならべたて、モモを説得しようとする。彼がまくしたてる理屈を聞いているうちに、さすがのモモもだんだん自信がなくなってきた、ひょっとしたら、この男の言う通りではないのかしら、と迷い始める。モモの心の動揺を見透かして、とどめをさそうとするかのように、BLW / 553 / Cは、モモに脅しをかける。絶体絶命になったかのように見えたモモは、啞然とするような最後の逆襲に出る。

「それじゃ、あなたのことを好いてくれる人はひとりもないの？」<sup>(29)</sup>

この灰色の男の論理を超えたモモのこの一言、しかも、灰色の男の最大の致命的な弱点を凶星で突いたモモのこの一言の逆襲にあって、攻守逆転、灰色の男 BLW / 553 / Cはガックリと肩を落とし、完全に平常心を失ってしまったのである。モモがこの一言で言わんとしていることは、この世で一番大切な価値は愛だということである。これこそは灰色の男たちに最も欠如していたものだったのである。ひとたびは、モモのまわりの世界は灰色の男たちによってモモ一人を残して全員征服されてしまうけれども、最終的には灰色の男たちはモモによって一人残らず消滅に追い込まれ、モモの愛によって帰属しあう社会が再び回復されるのである。

『はてしない物語』の主人公バスチアンは、途中いろいろな自由を試みたけれども、彼が最後に到達した自由も、愛に方向づけられた相互帰属的な自由であった。ファンタージェン国へ赴いたバスチアンが授かったアウリンには、「汝の 欲する ことを なせ」という銘が刻まれていた。この銘は、精神の自由を定言命法化した言葉である。バスチアンは、この定言命法に従って、文字通り欲する（意志する）ままに行動する。それによって彼が最後に到達した意志は、「あるがままの自分で生きよう」という意志であった。そしてその時彼が獲得したものは、あるがままの自分を愛することができるという「愛する能力」と、ありのままの自分を「愛する喜び」であった。ありのままの自分を愛するということは、愛の原点なのである。バスチアンは、愛する能力とありのままに生きる喜びを身につけて、ファンタージェン国からこの現実世界へ帰ってきたのである。そしてこの現実世界では、バスチアンは愛をもって彼の周りの人々に帰属し、喜びに満ちた仲間社会を形成してゆくのである。<sup>(30)</sup>

このように、『モモ』に限らず、エンデの大作はすべて、愛に方向づけられている自由がテーマとなっているのである。



## (2) 憎悪に方向づけられている帰属志向的自由

愛の原点は自己愛である。なお、この自己愛と混同される恐れのあるのは利己心である。利己心について、エーリッヒ・フロムは次のように言っている。

利己心は自己愛と同一のものではなく、正にその正反対のものである。利己心は一種の貪欲である。すべての貪欲がそうであるように、それは不充実感を内包していて、その結果そこには真の満足は存在しない。<sup>(31)</sup>

愛の原点は自己愛であるとすれば、憎悪の原点もまた自己憎悪であろう。

エンデの文学作品の中には、自己憎悪に方向づけられている自由も、少なからず登場している。自己憎悪が自由にゆだねられると、時には、自殺行為へと進んでいく。あるいは、自ら進んで自己を他者へ従属せしめる方向へ進んでいく。あるいはまた、自虐的な行為へと進んでいく。自己憎悪に発する行動は自由を求めながら自由を喪失していく。

他者へ向けられた憎悪が自由にゆだねられた場合は、他者を破壊しつつ支配する方向へと進んでいく。あるいは利己的な動機で他者への帰属を求める方向へ進んでいく。あるいは虐待しつつ他者を支配する方向へと進んでいく。いずれにせよ、この種の自由によっては自他共に満足感は得られないのだ。自己憎悪心は利己心に変容することもある。この場合にも満足感は得られない。

『はてしない物語』の主人公バスチアンは、物語の出だしにおいては、容姿の醜い、弱虫で、臆病な少年であった。おまけに学校の成績は悪く、落第生であった。そんな自分を彼は拒否し、憎悪さえしていた。そんな憎悪すべき自己像をまるごと持ったまま、彼はファンタージェン国へ行ってしまったのである。彼はファンタージェン国へ行くなり、彼が最も憎悪していた自分の容姿を捨てた。彼がファンタージェン国へ着いた時は彼は既に、考えられる限り最も美しくこの上なく上品な王子様の姿を取っていたのである。そしてファンタージェン国へ到着するや否や、バスチアンはファンタージェン国の女王「おさな心の君」＝「月の子」にお目通りがかなう。そして女王から、「汝の 欲する（意志する） ことを なせ」という銘が刻まれているメダル「アウリン」を授かったのである。つまり、バスチアンは女王から全権・全能を移譲され、新生ファンタージェン国の国造りを太初から任されたのである。完全な自由を与えられた王子様バスチアンは、まず忍耐強さと勇気を自ら望んで身につけ、更に魔法の剣シカンダを授かって、美貌にして最強の非の打ち所のない若王子様に変貌したのである。それに満足せず、バスチアンは自ら欲してファンタージェン国最高の慈善者となり、更に最高の知恵者となったのである。しかし、ファンター

ジェン国で彼が自由を行使して実現したものはすべて、それと対極の現実の醜い彼の本当の姿を一つずつ忘れるという代償を伴っていたのである。こうして彼は、憎悪すべき自分の実像を全部忘れてしまった、つまり抹消してしまっ、つまりなきものにしてしまった、つまり殺してしまったのである。これは正しく自虐行為であった。

アッハライは、これまた『はてしない物語』の月の子・ファンタージェン国で、最も醜い生き物で、彼らは自分たちの醜い存在そのものを悲しみ、洞窟の奥深くに身を隠し、一生の間毎日泣き暮らしていた。アッハライたちも、現実界のバスチアンと同様、自分を憎悪し悲しみにくっていたのである。彼らはバスチアンに出会った時、自分存在のあり方を全部バスチアンに託して、次のように言う。

「おお、偉大なる慈善者よ、アウリンの保持者よ、我々を救済する力の保持者よ、我々の願いはただ一つ、なにとぞ我々に他の姿を与えたまえ！」<sup>(32)</sup>

バスチアンは、彼らの願いを叶えてやり、彼らを美しい、そして毎日がただ楽しいだけのシュラムツフェンに変身させてやる。自己憎悪に利己心がからんで発動された自由は、決して満足をもたらすものではない。こうして、バスチアンの善意によって、常泣き蛾アッハライから常笑い蝶シュラムツフェンに変身させてもらったものの、彼らはもう一度バスチアンの前に姿を現す。それは、バスチアンがファンタージェン国での長い旅路の最終目的地「命の泉」に到達する一歩手前のところであった。

「おれたちや、お前さんをずうっと探していたのさ。…お前さんがおれたちのお頭になってくれるまでは、お前さんを放ってはおかないからね。お前さんにシュラムツフェンの上官さまに、シュラムツフェンのお頭さまに、シュラムツフェンの大將軍さまに、何でもいいや、まあそんなものになってもらわなくてはならないのさ、…お前さまに命令して欲しいのさ、お前さまにあれこれ指図してもらいたいのさ、お前さまにおれたちに有無を言わせず言いなりにして欲しいのさ、お前さまに禁止して欲しいのさ！」…

「去れ！」と少年は言った。「僕はもうお前たちのことはかまっておれないのだ！」「そんならお前さんは、おれたちをまた元に戻してくれなきゃいけないよ。…おれたちはまたアッハライでいたいんだ。」<sup>(33)</sup>

というわけで、自己を愛することのできない者は、たとえ極楽トンボにしてもらっても自分に満足することはない。むしろ再び、元の常泣き蛾アッハライにもどしてくれというのだ。正に自虐的願望である。

おおよそ愛する能力を持たない者は、自己を愛することができないと同様に他者を愛することはできない。愛することができない者が自由に、つまりその当人の欲するままに他者への帰属的行動を起こせば、そういう人の自由は、自己本位な他者支配的傾向をおびたり、他者破壊的傾向をおびることになる。

1991年、エンデが62歳の時の作品に、『レンヒェンの秘密』という短篇がある。レンヒェンのごく標準的なサラリーマンの中年のお父さんとごく標準的な中年の専業主婦のお母さんとの三人暮らしである。一人娘のレンヒェンだって、ごく普通の表面的には親の言うことには、まあまあ聞き分けのいい可愛い娘である。つまり、レンヒェンの家庭は、特別に問題をかかえているわけではない。普通のいい家庭である。しかし、両親とレンヒェンの意見や好みが違っていたり、対立することも時々ある。そんな時は、だいたい親の言い分が押し通され、レンヒェンは泣き寝入りしている。レンヒェンの我がままは通らない。レンヒェンは、内心いつもくやしい思いをしているのに、両親はレンヒェンの気持ちに無頓着である。

ある日、レンヒェンはたまりかねて、魔女の所へ相談に行く。

「わたしの両親のことなんです。」と言って、ため息をついた。「両親ときたら、本当にどうしたらいいかわからない。全然私の言うことなんか聞こうとしないのよ。」

「どこでもそういうものよ。」魔女は同情して言った。「私にどうして欲しいの。」

「…あちらはいつも多勢だから。」レンヒェンは言葉を続けた。「いつも2対1よ。」

「それはどうしようもないわね。」魔女は考え深げにつぶやいた。

「おまけにあっちは、私より体が大きいよ。」レンヒェンはつけ加えて言った。

「両親というものはだいたいそういうものよ。」

「もし私よりも体が小さければ、向こうが2人だってへっちゃらよ。」レンヒェンはたたみかけるように大声で言った。

「疑いもなくそうね！」魔女は言葉をはさんだ。

「たとえば、半分ではどうでしょう。」レンヒェンは提案した。…

「いいでしょう！」魔女はやっと大声で言った。<sup>(34)</sup>

というわけで、レンヒェンは魔女から角砂糖を2個もらって帰る。レンヒェンはその角砂糖をお父さんとお母さんのお茶の中に入れて飲ませてしまった。

そうすると、お父さんもお母さんも、レンヒェンの言いなりにならないと、その度に体の大きさが2分の1になってしまうのである。まず、お父さんが184cmから92cmに縮まり、お母さんは168cmから84cmに縮まってしまったのである。お父さんとお母さんは、さあ大変！ しかし、レンヒェンは、愉快でたまらない！ もうお父さんなんか、ちっとも怖くはない！ レンヒェンはお父さんとお母さんを見下して、大の得意である。レンヒェンは、92センチに縮んだお父さんと、84センチに縮んだお母さんを写真に撮っておく、と言い出す。お父さんは、「ならん！」と言うと、またプスーッと更に半分に縮まる。お母さんも「そらだとも！」と言うと、お母さんも、プスーッと更に半分に縮まってしまったのである。今はお父さんは46cm、お母さんは42cm。なんだかんだと、お父さんはとうとう11.5cm、お母さんは10.5cm。お父さんとお母さんは、ソファの下へ逃げ込む。もうレンヒェンに細かく指図する人はもう誰もいない。レンヒェンはやっとせいせいした気分。しかし、いいことばかりではない。今、生活のことは何もかも、自分でしなければならなくなってみると、自分ではほとんど何もまともにはできないことが身にしみてわかってくる。次の日には、レンヒェンの友人マックスが訪ねてくる。猫を連れて。ソファの下に隠れていたお父さんとお母さんは、あわやその猫に捕まって食われてしまいそうになる。レンヒェンにもやっと事の重大性がわかってくる。お父さんとお母さんがいなくなったらどうしよう。孤児院へ行くなんて、嫌だ！ そこでレンヒェンは、もう一度、魔女の所へ訪ねて行って、お父さんとお母さんを元の大きさにしてもらおう。しかし、レンヒェンはその代償として、例の角砂糖を自分でなめなければならなくなる。それで今度は、お父さんやお母さんの言うことを聞かなければ、自分がその度に半分に縮むはめになったのである。そのため、レンヒェンは、以前よりおとなしい子になった、という話である。

筆者は、レンヒェンが特にサディスティックな性格の子であると言いたいのではない。幼児とか子供は、一般にそういうものだが、彼らの心の発達レベルは、自己中心的なのである。利己的だとも言えるであろう。お父さんやお母さんを好きだ、と言ったって、それはお父さん、お母さんが自分に快感を与えてくれるからである。それは、発達した精神機能としての愛とは異なる。レンヒェンも普通の子供である。お父さん、お母さんを好きではあろうが、その関係の仕方は自己中心的なのである。自己中心的な人が自由に他者との帰属関係に入っていく場合、その帰属関係は多少なりともサディスティックな特徴をおびるものなのである。大人の場合も、同じような精神レベルな人は、レンヒェンと同

じように行動に出るであろう。そういう意味で、『レンヒェンの秘密』は、人間一般に当てはまる自由の一つの類型を物語っているのである。

## 2. 理性によって方向づけられた帰属志向的自由

従来の価値観が崩壊した時とか、虚無感に襲われた時など、人間は自分の生活を意味づける新しい価値観を求め、何とかしてそれに帰属しようとするものである。この場合、理性主導の論証と真偽・善悪の判断が伴う。

『モモ』の中に登場する床屋さんのフージー氏は、彼なりに理性的に考え、理性的に決断を下しているのである。彼は評判のいい床屋さんで、使用人は一人いるが、その日は休み。まだ客も来ていない店で、一人ぼんやり路上に降りしきる雨足をながめている。

「おれは人生をあやまった。」フージー氏は考えた。「このおれが何者だというのか？ しがない床屋にすぎない。とにかくこれが今のおれだ。でも、もしちゃんとした生活を送ることができさえすれば、まだまだこのおれだって別人さ。…でも、」彼は気落ちして思った。「こんな仕事をしていたのではそのための時間はない。そのちゃんとした生活をするためには時間が必要なのだ。でもおれの一生は、はさみチョッキン、チョッキン、おしゃべりペチャクチャ、シャボンの泡々、これで終わりだ。」<sup>(35)</sup>

フージー氏は、彼の今までの人生に落胆し、何かまだはつきりしないけれども、何か新しい生き方を模索していたのである。その時、彼の店の中へ一人の立派な身だしなみの灰色の男が入ってきたのである。彼は、時間貯蓄銀行の外交員 XYQ / 384 / b 氏であった。この XYQ / 384 / b 氏は、不思議なくらいぴったりとフージー氏の心の動きにそって、巧みに時間の節約をすすめ、その節約した時間を彼の銀行に貯蓄するよう勧誘する。まずこの b 氏は、フージーさんの今までの人生 42 年間で計算して店の鏡にフェルトペンで書く。1,324,512,000 秒、その上で b 氏はフージー氏に、今までの人生 42 年間で浪費してしまったことを認識させた上で、今までの人生の総決算を次の数式で鏡の上書き示す。

$$\begin{array}{r} 1,324,512,000 \text{秒} \\ -1,324,512,000 \text{秒} \\ \hline 0,000,000,000 \text{秒} \end{array}$$

フージー氏は、今朝から自分の人生に幻滅を感じてももの思いにふけていたところだったので、b 氏の言葉に完全に納得し、残額の 0,000,000,000 に本当に

そうだと思い、改めて気落ちする。その心の動きを見て取ってb氏は切り出す。

「こんな調子でやっているとはいけませんか、フージーさん。節約しようという気にはなりませんか？」

と切り出したのである。b氏が言うには、もしフージー氏が20年前から1日2時間ずつ節約していれば、今では26,280,000秒たまっていたはずである。もしも、これから先20年間62歳になるまで同じように1日2時間ずつ節約していけば、その倍の52,560,000秒貯まるはずである。我々の銀行では5年毎に元本の倍の利子をつけるから、フージー氏が62歳になるまでの40年間では、節約して我が銀行に預けておいた時間の総額は

26,910,720,000 秒

になるといい、それを鏡の上に書いて、次のようにたたみかける。

「ごらんなさい、フージーさん。」彼は初めて薄笑いを浮かべて言った。「これはあなたが本来持って生まれた人生の総額の10倍以上ですよ。しかも、1日たった2時間ずつの節約でこれですよ。もうかる貯蓄だとは思いませんか。」

「まったくです！」フージー氏はすっかり疲れた様子で言いました。「疑いもなくそうです！ 前から節約を始めていなかったこの私は、本当に不幸なカラスだ。今になって初めて気がつきました。白状するが——私は絶望的だ！」

「そんなことはありません。」灰色の男はものやわらかに答えた。「決して遅すぎることはない。あなたがその気なら、今日からだって始めることができるのです。それはもうかるってことが、おわかりになるでしょう。」

「無論はじめますとも！」フージー氏は大声で言った。<sup>(36)</sup>

要するに、これはこういう話だ。この日の朝、フージー氏は、彼の人生42年間の結果である今の自分に、床屋という職業や生活の質を含めて、ぼんやりと虚無感を抱いていた。もしも自分に時間さえあれば、自分にだってもっとましな生活ができるのだ、という漠然とした気持ちも同時に抱いていた。しかし、その時間がないという閉塞感に陥っていた。

ここへ、時間貯蓄銀行の外交員が現れて、1日毎2時間の時間の節約という枠組みとしては極めて明快で苦もなく実行できそうな条件を提示し、それを実行すれば彼が62歳になる20年後には彼の人生の10倍以上にも相当する269億1千72万秒もの時間が貯蓄できることを計算してみせたのである。この計算は1

分 = 60 秒というフージー氏にも疑う余地のない事実を基にして、あとはその掛け算ばかりだから、その結果である 269 億 1 千 72 万秒という結果も、計算としては理路整然として正確、疑う余地のないものと見たのである。ここがこの話の要点である。だからフージー氏は、即座に XYQ / 384 / b の提案に同意したのである。この論理がいかに現実と相容れないものであり、現実問題としてはいかに不確実なものであり、なおかつこの論理の結論は現実には全く無意味なものであることは、この時のフージー氏にとっては、思いもよらないこと。論理と現実とのこの乖離。それはそれとして、とにかく、フージー氏はフージー氏なりに、論理に従って、理性によって、新しい決断をしたのである。フージー氏の理性がどれ程のものだったかは別として、理性によって導かれた意志決定によって、フージー氏は XYQ / 384 / b 氏の提案に同意した。つまり、フージー氏は、灰色の男の価値観に帰属したのである。それは、まぎれもなくフージー氏の自由な決定であった。

### 3. 直観に方向づけられた帰属志向としての自由

自由という問題を論ずる場合、エンデにおいては人間の持っている「直観」という能力はきわめて重要である。エンデの言わんとすることを、ここで改めて明確にしておこう。

もしも人間が完全に因果律（原因—結果の必然的關係性）に従うものとするれば、人間には真の自由は存在しない。

しかし人間には事実として確実に因果律によって律せられ得ない面がある。それは直観である。直観は因果律の内部にとどまるものではない。

従って、人間が直観を有する限り、人間は因果律の内部にとどまるものではない。すなわち、人間が直観を有する限り、人間は因果關係の必然性に束縛されるものではない。この意味で、人間は真の自由を有する。これが、エンデの主張の一つの点である。

エンデの主張にはこれと関連してもう一つある。テクノロジーは、因果律理論の内部にとどまるものである。これに対して、直観は因果律の内部にとどまるものではない。従って、テクノロジーに頼っていたのではできないことであっても、直観によればできることもある、ということである。

エンデの言う「直観」とは、因果律の束縛なしに何かまったく新しいものを自分の中から生み出す能力のことであって、昔から神秘的思想家たちが Fünklein（ひらめき）と呼んできたもので、神の創造能力と共通の能力なのである。

以上によって、エンデの言う「直観」というものがどういうものなのか、概念としては明確になったとしても、では、このような概念の直観能力を有する者はエンデの文学作品の中に登場しているのでしょうか。もしいるとするなら、その者は誰で、どんな行動をして、どんな自由を実現するのであるだろうか。

この疑問に関しては、結論を先にして、その証明はその後のこととしよう。直観能力を具有している登場人物はいる。それは『モモ』の中で登場してくるカシオペイアとモモである。物語の上では、カシオペイアは動物のカメであり、モモは少女である。カシオペイアは、モモが窮地に陥った時、救助者として登場し、超能力を発揮してモモを灰色の男たちから救い出し、モモを「どこにもない館」の主マイスター・ホラの所へ導いて行く役割を果たしている。この物語を、次のように解釈してはどうか。カシオペイアはモモの頭脳をひとり立ちさせたものである。カシオペイアの甲羅に文字として浮かんでくるメッセージは、実はモモの脳裏に浮かんだモモの直観内容である。とすればモモがカシオペイアに導かれて灰色の男たちの激しい追跡をくぐりぬけ、カシオペイアの助言によって不思議な「一度もない小路」を進み、この世ならぬ「どこにもない館」に住む異界の住人マイスター・ホラのもとへたどりついたというのは、モモ自身の直観によってモモ一人で成し遂げた行為である、ということになる。

では、この解釈を正当化する根拠はあるのか。『闇の考古学』で、エンデは次のように言っている。

カメをじっと見つめていると、カメというものは歩く頭蓋である、ということに気がつくでしょう。人間の頭蓋とそっくりです。そして仮に頭蓋が自立して、世界を歩き回れるようになれば、それがカメなのです。<sup>(37)</sup>

エンデのこの言葉を読み合わせれば、カシオペイアは、モモの頭蓋が自立して歩き回っているものである。また、カシオペイアの甲羅にほんのりと光って浮かんでは消える文字メッセージは、モモの脳裏に浮かんでは消える表象を自立させたものである、と断定していいであろう。

物語『モモ』自体の中にも、上記の断定を裏打ちする言葉はいくつか見受けられる。その一つは、モモがカシオペイアに案内されて、再度マイスター・ホラの館へ行くことになった時の2人の会話である。

「なぜあなたはどうしても自分で這って行かなければいけないの？」モモはたずねた。

これに対して、次のような謎めいた答えがあらわれた。「ミチハ　ワタシノ　ナカニ　アリマス。」<sup>(38)</sup>



この言葉は、ワタシ=カシオペイア=モモの頭蓋と読み替えて初めて解る言葉なのである。「ミチハ ワタシノ ナカニ アリマス」ということは、マイスター・ホラの館へ行く道は、私（モモ）の頭の中にあります、という意味なのである。

カシオペイアはモモの頭蓋が自立して歩き回っているものであるとすれば、モモがエンデの言う直観の持ち主か否かということは、カシオペイアの発信するメッセージや行動がエンデの言う直観に合致するか否かということと同じことになる。

それ故、もしモモがエンデの言う直観の持ち主ならば、カシオペイアは、

一、因果関係の束縛なしで、全く新しい認識なり行動なりを自分の中から生み出すことができなければならない。また、カシオペイアは

二、テクノロジーができないことを実際にやりのけなければならない。

まず、一の点について検討してみよう。現在、我々が住んでいる膨張宇宙系の中では、時間系列は必然的に過去→現在→未来へと流れていく。従って、我々の膨張宇宙系の中での物事の現象も必然的にこの時間系列の中でしか起こりようがない。因果関係ということは、この時間系列の中での現象と現象との関係のことである。因果律というのは、原因となる現象は、結果となる現象に必然的に先行するという法則のことである。因果律に束縛されるということは、必然的にこの時間系列に従うということである。つまり、過去に起きた現象は原因であって、現在起きている現象は結果なのである。今住んでいる我々の宇宙系の中では、現在起きている現象が原因となって過去に起きた現象が結果となることはあり得ない。同様に、未来に起きる現象が原因となって、現在起きる現象が結果となるという関係はあり得ないのである。

それでは、カシオペイアのある二つの現象関係は、どうなっているのであろうか。カシオペイアに案内されて、灰色の男たちの激しい追跡をかくぐってマイスター・ホラの館にたどり着いたモモに、彼は次のように説明して話している。

「カシオペイアはね、」マイスター・ホラは説明した。「少し未来を見ることが出来るのだよ、たくさんじゃないけどね、でも約半時くらい先までならね。」

「セイカクニ！」という字が甲羅に現れました。

「ごめんね。」マイスター・ホラは訂正しました。「正確に半時間だ。カシオペイアはね、半時間先までに起きることなら、正確に予知できるのだよ…。」

「まあ、」モモは感心して言った。「すごく便利なのね。あそこあそこで灰色の男たちと出会うということが予めわかっているのだから、他の道を

行けばいいだけでしょ？」

「いや、」マイスター・ホラは答えた。「残念ながら、ことはそう簡単ではないのだよ。彼女は、予め知ったことを変えることは全くできないのだよ、なぜなら、彼女は本当に起きることしかわかるにすぎないからだ。だから、彼女があそこやあそこで灰色の男に出会うだろうということがわかれば、彼女は本当に彼らに出会うでしょう。それに関しては彼女はどのようなことも出来ないのだよ。…たとえば今回の場合は、この道とこの道を行けば、そうすれば灰色の男たちには出会わないということを彼女はちゃんと知っていたのだよ。」<sup>(39)</sup>

ここで述べられているのは、こういうことであろう。普通の人間の認識能力では、過去にAという原因があつて、それに対応して必然的にBという結果が生じていることが、認識できるだけである。A（因）－B（果）関係は必然的な関係であるから、そしてこれは既に生起してしまったことであるから、その生起自体をさしとめることもできないし、その必然性の組合せを変えることもできない。そして、普通の人間は未来を知ることにはできない、つまり未来に対しては人間は盲目であるから、現在のB（原因）にどんな結果が生起するかを知ることはできない、必然性に支配されて闇の中へ突入し続けることしかできないのである。

これに対して、カシオペイアの認識能力（直観）によれば、現在のBという原因に対応して必然的にCという結果が未来において生起するということを知っているのである。あるいは、Dという現在の原因には、必然的にEという結果が未来に生起するということもカシオペイアには認識することもできる。つまり、これを図式的に表現すれば次のようになる。

	過去	現在	未来
普通の人間の認識能力：	A（原因）	→ B（結果）	→ ?（結果）闇の必然的
カシオペイアの認識能力：		{ B（原因）	→ C（結果）明の必然的
		{ D（原因）	→ E（結果）明の必然的

ただし、いかにカシオペイアといえども、B－Cの因果関係をB－Eという因果関係に変えることも、D－Cという因果関係に変えることもできないという。

それならば、カシオペイアもトロイの王女カッサンドラと同じではないか。今かくかくしかじかの現状（原因）があつて未来においては必然的にトロイの滅亡に到る、ということを明確に認識（予知）しつつ、カッサンドラはその因

果関係を変えることも、他の因果系列を自分の自由意志で選ぶこともできなかった。なぜなら、カッサンドラはアポロンの怒りを買ったため、彼女の予言は誰からも聞き入れられない運命に従わざるをえなかったからである。すなわち、カッサンドラは、現状を変えることができなかつたからである。つまりカッサンドラにはB-Cの因果系列に代えて、D-Eの因果系列を選ぶ自由な選択が不可能だったからである。では、カシオペイアの場合はどうであろうか。マイスター・ホラはモモに次のように言っている。

「カシオペイアは時間の外側の存在なんだよ。彼女は自分自身の小さな時間を自分自身の中に持っているのだよ。だからすべてが停止しても、彼女は世界の向こうまでだって行くことができるのだよ。」<sup>(40)</sup>

カシオペイアは、「自分自身の時間を自分自身の中に持っている」という。ということは、カシオペイアはB-Cという因果系列に束縛されずに、E-Dという自分自身の時間系列（因-果系列）によって行動することもできるということだ。同様に、カシオペイアはD-Eという自分自身の時間（因-果関係）によって行動せずに、B-Cという因果系列によって行動することもできるのである。つまり、カシオペイアは各因果系列の組合せは変えることはできないけれども、自分を束縛するあらゆる因果系列を自由に選択することができるというわけだ。この点で、カシオペイアはカッサンドラと異なるのである。従って、カシオペイアは、あらゆる因果律の束縛から自由なのである。それ故、カシオペイアの能力は、正にエンデの考えている「直観」にふさわしいと言える。

次に、直観について第二番目の観点から検討してみよう。つまり、カシオペイアは灰色の男のできないことでもやり遂げることが実際できるのであろうか。

これは、モモがカシオペイアに導かれてマイスター・ホラの「どこにもない館」へ赴く時の様子である。2人は灰色の男たちの追跡を逃れながら、町はずれの高層アパートの建ち並ぶさびれた限界にさしかかる。夜中の零時すぎ、人影は全く見当たらない。そんな所から横丁に折れると、不思議な小路に入り込んでしまったのである。その横丁に入った途端、そこは真夜中でもない、真昼でもない、不思議なほの明るさの光に満ちていた。その小路の両側には白い家が建ち並び、人の気配はおろか、生き物の気配が全くないのである。何よりも不思議なことは、カシオペイアは前よりもずっとゆっくり歩いているのに、2人はものすごく速く前に進むのである。モモがその小路に入った時、モモはついに、車に乗った灰色の男に目撃されてしまったのである。

ところが、灰色の男の車がこの曲がり角までくると、とても信じられない

ことが起こったのです。突然自動車は全然前へ進まなくなりました。運転手がいくらアクセルを踏んでも車輪はうなり声をあげるだけで、まるで逆向きに同じ速度で走っているベルトコンベアーの上を走っているみたいに、同じ所を走っているのです。彼らが速度をあげればあげるほど、それだけますます前へ進まなくなるのです。灰色の男たちはこれに気がつくと、罵り声をあげながら車から飛び降り、遠くに見えるモモを今度は足で走って追いつこうとしました。彼らは顔をゆがめて一生懸命走りましたが、ついに力つきて足を止めた時、彼らが進んだのはたった10メートル程にすぎなかったのです。モモは、雪のように白いはるかかなたの家々の家並みの向こうへ姿を消してしまいました。

「終わりだ。」灰色の男の一人が言いました。「もう、おしまいだ！ もはやあの子はつかまえられる。」

「わからない。」他の灰色の男が言いました。「なぜおれたちは全然前に進められなかったのだろう。」<sup>(41)</sup>

正に、この情景について、エンデは子安氏との対談の中で、次のように述べている。

エンデ …どうにかして外部世界と内部世界を、もう一度相互に浸透し合えるもの、循環可能なものにしていくこと、…それは私にとっての急務です。テクノロジーの外界を変えて、人間の内面世界を映しださうものにするか、あるいは人間の内面世界を拡大して、テクノロジーを抱え込むことができるようにするか？ 答は私にはまだわかりません。ただ、私は、本を書きながらひたすらその試みもしている。とにかく今のままでは、灰色の男たち、つまりテクノロジーは、モモにできることをできないのです。<sup>(42)</sup>

これで一目瞭然である。モモは、言うまでもなくカシオペアも、テクノロジーができないことをやってのけることができるのである。モモの持っている能力は、正しく「直観」である。そして今、モモは直観に基づいて、灰色の男、つまりテクノロジーの束縛から逃れて、マイスター・ホラへの帰属の自由を実行しているのである。

## V. 最終的帰属としての即自的自由

人間はこの世に生まれ出る限り、必然的に何らかの存在規定の中に置かれる。その存在規定が、不快な束縛として認識された場合、人間の心・精神の中にまず初めにその束縛からの離脱願望・離脱志向が生まれる。この離脱願望は、あ

る場合には情動に操られて、ある場合には理性に導かれて、ある場合には「直観」に助けられて、意志決定へと到る。この過程が精神の自由の問題である。この意志決定が行動へ移される場合、行動の自由が問題となる。精神の自由と行動の自由が共に実現されて初めて、人間は自由を感じる。しかしこうして離脱の自由が実現されても、そこに待っているのは、孤独と意味の喪失感だけである。人間は普通、その孤独や意味の喪失感には耐えられない。普通人間は、その孤独を癒してくれる人や、捨てた意味の虚を満たす新しい意味、新しい意義、新しい理念を求める。こうして、今度は帰属願望が心の中に生じる。この後の心の機序は、離脱願望が生まれた後からの心の機序同様の経過をたどって、新しい存在規定の中へと入っていくのである。ところが、こうして自由によって獲得された新しい存在規定が、必ずしも新しい自由を実現するとは限らない。否、それが新しい不快な束縛として意識される場合もある。こうしてまたもや、新しい離脱志向の自由と新しい帰属志向の自由を実行しつつ、更に新しい存在規定を獲得していく、こうして人間は自由の実現を求めて、この存在規定から次の存在規定へと放浪の旅を続けることになる。普通はこの放浪の旅は、死ぬまで続けられる。放浪に疲れはて、怠惰に立ち止まる場合を除けば、自由を求める放浪の旅が終わるのは、次の二つのうちいずれかの場合のみであろう。

一、たどり着いた存在規定を絶対的自由として自覚する場合

一、たどり着いた存在規定を完全に無自覚化し、完全に満足する場合

### 1. 絶対的自由への帰属意識としての自由

1993年、エンデが他界する2年前、彼が63歳の時の作品に『満月の夜の伝説』がある。

何百年も前、天使やデーモンがいることを人々はまだ知っていた時、森の奥深くの荒涼たる谷間に、一人の敬虔な隠者が住んでいた。彼はまだ若かった頃、徳と美の鑑と世間で讃えられた妙齡の婦人に、死ぬ程恋い焦がれた。彼女は永遠の愛と忠誠を誓ったのだが、結婚式の前日、彼女は聖なる誓いを破って、ある男と、駆け落ちしてしまった。

これはおそらく次のことと関係があった。彼の父はそれまでは金持ちで有力な商人だったのだが、嵐によって彼の船一切合切を失い、一夜にして乞食に成り下がっていた。この二つのでき事がある、この若者は、この世のことはすべて見せかけ、まやかしの何ものでもない、と、固く信じるに到った。彼は世を捨てた。そして聖なる書物の研究に専念した。<sup>(43)</sup>

こうしてこの若者は、定石通り彼の原初的存在にいたたまれなくなって、新しい存在、新しい価値、新しい理念を求めて自由の放浪の旅路についたのである。

この若者は、感情に突き動かされてか、理性に従ってか、直観のひらめきによってか、いずれによってなのか定かではないが、聖なる世界、聖なるもの、聖なる価値への帰属を志向したようである。まずは彼は、彼が求める新しい自由が、聖なる書物を机上で研究することによって獲得されるのではないかと思ったのである。そこで彼は、アウグスチヌス、ヒエロニムス、ディオニシウス、大アルベルトゥス、ついにはトマス・アクイナスの全著作を研究しつくした。しかし、この若者がとどのつまりたどり着いたところは、かの聖者が死に臨んで残した次の言葉だった。「私の書物はことごとく中身のない空虚な麦わら以外の何ものでもない。」<sup>(44)</sup>

こうして彼は、彼の求める聖なるものが書齋の中にも、書物の中にもない、と悟ったのである。

真夜中ではあったが、彼は即刻、書齋も書物も永遠に捨て、そこから立ち去った。

彼は長い間、あてどもなく世界中を彷徨い歩いた。ついに彼は、かの人里離れた山奥の谷の中に迷い込み、森の中に岩の洞窟を見つけた。彼はその洞窟の中に身を横たえ、眠りについた。そして彼は炎の夢を見た。その炎の中から一つの声が彼に語りかけた。「ここにとどまれ、私はここでおまえと会おう！」そこで彼はここにとどまって、待つことにした。<sup>(45)</sup>

結果から言えば、この洞窟が彼の身体の終の住み処である。しかし、炎の中から声が聞こえてきて、「私はここでおまえと会おう！」ということは、ただ事ではない。これは明らかに、旧約聖書の出エジプト記の中のモーゼと神との出会いの場の寓喩である。<sup>(46)</sup>とすれば、「私」とは神ヤーヴェということになる。こうしてこの隠者は、ここで約束の成就を待つことになったのである。

このことがあってからもうどれ程の年月が流れ去ったか、この隠者にもわからなかった。彼はこの洞窟の中で、全身全霊をあげて瞑想に耽り、永遠をめざしていた。白く長く伸びた髪と髭は骨と皮だけになった身体をマントのように足までつつんでいた。洞窟の中には静寂と平和が満ちあふれ、その平和はその森の中へもあふれ出していった。彼の髪の毛の中には小鳥たちが巣を作り、足の間にはクモたちが見事な網を張り、膝の上には毒ヘビがとぐろを巻いて眠った。クマがやってきて、彼の側でごろりと横になり、眠った。洞窟の周りには

平和な時が流れた。

ある日のこと、どういふ巡り合わせか、この森の中に一人の人間が迷い込んできた。この男もこの隠者に負けず劣らず孤独な男だった。まっとうな人間社会からは理不尽にも締め出され、盗賊団の中に逃げ込み、悪の限りをつくしていた。しかし、彼の純朴さと愚直さが災いして、今では彼の仲間の盗賊団からも命をつけねられる身の上であった。彼には恐れるものは何ひとつなかった。神をも恐れず、敬虔の気持など、薬にしたくても爪の垢程もなかった。この無頼漢もこの森を住処とし、帽子が必要になれば僧主を襲って僧帽を奪い取り、靴やズボンが必要になれば旅人を襲ってはぎ取った。時々村に出れば火酒を盗み、ぶどう酒が欲しくなれば教会に押し入って、ミサ用の赤ぶどう酒を盗み取った。御機嫌な時は、森の中で一人で一日中笑ったり、歌ったりしていた。人の気配だけは極度に避けた。こんな生活を何年送ったのか、この無頼漢にもわからなかった。彼は徐々に、人の言葉を忘れていった。その代わり、この無頼漢には、森の小鳥の鳴き声とか、動物の啼き声の意味がわかるようになり、彼らのわずかな身の動きの意味さえも感じ取ることができるようになったのである。

ある日のこと、この無頼漢は腹ぺこになって、狩りに出た。飛び出してきた一頭の鹿の後を追っていくと、隠者の洞窟の前にたどりついたのである。

「おい！ こら！ おまえは人間かい、それとも何かい？ …やい！ 聞こえないのかよ、この骨皮野郎！ 返事くらいしたらどうだ！」<sup>(47)</sup>

その盗賊は、この老人を足で突っついて、こぶしをふりあげた。しかし、この老人は身じろぎ一つしなかった。盗賊はふりあげたこぶしをおろした。急になぐるのがいやになったのだ。それのみか、この盗賊はその時、急に、抗うことのできない安らぎに満ちた疲れに襲われて、その場で眠ってしまったのだ。老隠者は幼児のようにスヤスヤ眠っている無頼漢を見て、この男を弟子にして永遠のものごとへの手ほどきをしてやろうと心に決めた。

何故か、この盗賊もこの老隠者が気に入ったと見え、彼の語る言葉によるこんで耳を傾けた。時々フラッといずこへとも知れず遠出することがあっても、必ずこの洞窟へ舞い戻ってきた。隠者は彼に、神の奥義を説き、神の恩寵を願って祈るよう、諭した。盗賊は隠者の言葉に感心して耳を傾け、時々わかったかのように相づちさえ打った。しかし、本当のところ、彼にはまるっきり理解できなかった。この盗賊にとってはこの隠者の言葉はあまりにも高尚すぎたのである。しかし隠者の忍耐と善意は、弟子の頑迷さに引けを取らなかった。何年も隠者はこの頑迷な弟子に神の奥義を説き、そして神には、この哀れな罪人の

心の闇を照らす奇蹟を起こしてくださいと祈った。しかし、ある日がやってきた。隠者は弟子にこう言い渡したのである。

「息子よ、おまえは今日以降、満月の夜にはここへやってきてはならぬ。おまえはわしにこれを誓ってくれなくてはならない。」

「いいとも」盗賊は言った。「しかし、なんでだい？」

「わたしは大いなる恩寵をいただくことになったのだが」隠者は答えて言った。

「おまえの頭はあまりにも頑迷で、わたしはおまえにこの秘義をうちあけることはできないのだよ。だから、これ以上は聞かないでくれ。」

「わかった。」盗賊は言って、うなずいた。<sup>(48)</sup>

その後、この隠者は口をつぐんでいることが多くなり、その両目にはこれまでになかったような閃きが宿り、落ち着きのない小さな炎が燃えているのを、弟子は見落としてはいなかった。他方、隠者も、弟子の顔に浮かぶ言葉なき問を見逃してはいなかった。その7カ月も後になって、隠者は弟子に秘密を打ち明ける決心をした。

「息子よ、私がおまえに、満月の夜には私の所に訪ねてこないように約束させたのは、おまえはそう思っているかもしれないが、それはけっしておまえを罰するためではないのだ。そうではなく、とても奇蹟的なことが起きたからなのだ。それは今もなお起きている。息子よ、おまえも知っておかなくてはならないことだが、大天使ガブリエル様は天の霊界にあっては月界の支配者であられる。その大天使ガブリエル様が、満月の夜毎に下界におくだりになって、ここに来てくださるのだよ。…」<sup>(49)</sup>

この盗賊が、師の洞窟のまわりに微妙な変化が起き始めていることに気づかなかったなら、この弟子は師の言葉に疑問を懐かなかつたであろう。しかし、この盗賊は、しばらく前から洞窟のまわりの動物たちの様子が少しおかしいのに気づいていた。1羽のオオタカがウサギの子を襲うことさえあったのである。こんなことは、この洞窟のまわりではなかったことだ。弟子は師のことを案じ始めた。何か良くないことが師の身の回りに起こりつつある、それをくい止めてやろう、もしその原因が大天使ガブリエル様にあるのなら、大天使様からさえ師を守ってやろう、盗賊はこう思ったのである。

次の満月がやってきた時、盗賊は師との約束を破る決心をした。彼は、ひそかに隠者の洞窟に近づき、様子をうかがっていたのである。やがて、はるか遠くの木々の上の方に、小さく銀色に輝くものが現れた。その銀色の雲のように



輝くものはどんどん近づいてきて、どんどん大きくなった。洞窟の前で地上数フィートの空中に静止した。まず、2羽の怪鳥グリフィス、その怪鳥の引く車、その車の中には光を放つ者の姿、その姿が手にするユリの花、…隠者は地に額をつけたまま、身動きさえしなかった。盗賊はというと、初めは口をあぐりと開けて見とれていたが、すぐに我に帰って思った。どこかおかしいぞ。盗賊は弓に矢をつがえ、十分にねらいを定めて矢を放った。矢は輝く者の喉を貫いて突き刺さった。グリフィスは棒立ちになって、車を引いたまま宙を駆け去った。遠くから車が茂みに突っ込む音がして赤い光が燃え上がり、やがて消えた。隠者は矢のうなりに驚いて身を起こし、何もかも見た。

「地獄の鬼め！」聖者は我を忘れて怒鳴った。やせこけたほおの上に涙が流れた。

「嘘つきの呪われた悪魔め！　なんてことをしてくれたのだ。…」<sup>(50)</sup>

しかし盗賊は、あれは大天使ガブリエル様なんかではないと言う。盗賊は、気を失いかける程怒る老人を抱きかかえて、先程赤く燃え上がった森へ行ってみると、そこには喉を矢で貫かれた1匹のアナグマが死んで落ちていた。

「見なよ。」盗賊は言っただけで人がよさそうに笑った。「あんたがおれに言ったじゃないか、いろんな動物の体の中に入って、いろいろな悪事を働く悪魔もいるんだって。こいつがそれさ。やつはいい、どこへ行っちまいやがったか知らないけどよ。」…

「それにしても、なあおまえ、私の息子よ、いいだろどうしてこれを見破ることができたのかい。この私でさえ見破れなかったのに。」

「簡単さ。」盗賊は答えた。「あんたがおれに言ったじゃないか、聖なる者は聖者にしか見えないものだって。だから、あんたみたいに賢くて、聖らかな生活を送っている者が大天使ガブリエル様を拝むことができても、それは当然だよな。でも、おれみたいに罪深く頭の悪いやつが、おまえさまと同じようにはっきりと大天使ガブリエル様を見たんだよ。その時おれは自分に言ったのさ、これは何かおかしいぞ、って。それでやったのさ。」

隠者はしばらくの間、だまったままだった。…かすかにすすり泣く声が聞こえてきた。

「どうしたんだい？」盗賊が気遣ってたずねた。隠者は小声で言った。「恥ずかしいんだよ。」

「なぜさ？」

「私は今まで、おまえの魂を救ってやらなければならないなどと、思って

いたのは私の思い上がりだった。それどころか、私の魂は今おまえに救われたのだよ。昔見た夢の約束が、成就されたのだよ。私が思っていたのは全く違う仕方だけどね。おまえによってね。…」<sup>(51)</sup>

ユダヤ教の系統の宗教、たとえばキリスト教では、神ヤーヴェは唯一絶対創造主であり、人間からは隔絶された高みに在る存在そのものである。唯一絶対の創造主であるから、つまり被造物（被造的存在）ではないから、永遠の絶対的に自由な存在そのものである。人間からは隔絶されている存在であるから、人間は、神との接点をさえ持つことはできない。ましてや、人間がいかに努力（修業）しようと、人間が神になることも、神と同等なものになることも絶対に不可能なのである。人間にとって神が実在するためには、人間と神との間をとりもつ存在、神の人間への使者、すなわち天使が不可欠なのである。神の使者、すなわち天使は靈的な存在とされている。その天使にもその役割とか、神からの近さ・遠さなどによって、階層があるとされている。この老隠者の前に顕現したと思われていた大天使ガブリエルは、神に直接仕えている天使、天使の中でも最高位の天使とされている。他方、天使は神と人間とをつなぐ任務を担っている存在である関係上、本質的に人間との接点を、つまり人間との共通点をも有する存在である。従って、天使といえども、人間と同様に神から離反する可能性も具有している。神から離反して靈界から落ちた天使は、墮天使と呼ばれたり、悪霊と見なされたりしている。墮天使の代表的なものがルシファーである。

ところで、この老隠者は、満月の夜に訪れる靈界からの使者を、大天使ガブリエルであると、一点の疑いもなく信じ切っていた。そしてこの大天使ガブリエルの御降臨こそ、彼が何十年もの間全身全霊を捧げて神を瞑想しつつ待ちわびていた神の約束の成就そのものである、と確信してしまっていたのである。つまり、この老隠者の思い込みによれば、「この地にとどまれ。私はおまえに現れるであろう。」と約束をしたその「私」は、大天使ガブリエルだったのだ、と早のみこみをしてしまっていたのである。

しかし、毎月の満月の夜毎、この老隠者に降臨して姿を見せていたのは、アナグマに憑依して大天使ガブリエルに化けた悪霊、すなわち墮天使だったのである。その悪霊は、ひょっとしたらルシファーだったかもしれない。この悪霊の正体は不明である。しかしとにかく、この老隠者は、敬虔の念など全くもたない元盗賊の牡牛のように純朴な弟子によって、悪霊の呪縛から解放されたのである。とすれば、夢の中のお告げによってこの隠者に約束された出会いとは、

この弟子との出会いだったということになるのであろう。

この大団円の基礎となっているのは、「等しきものは等しきものによって認識される。」という認識論上の法則である。この大団円には、この法則と、聖なるもの、悪なるもの、獣なるもの、この三つのものが絡み合っているのである。この法則をこの三つのものにあてはめると次のようになる。

聖なるものは、聖なる者によって認識される。従って、聖なる者は聖ならざるものを認識することがない。

悪なるものは、悪なる者によって認識される。従って、悪なる者は、悪ならざるものを認識することはできない。

獣なるものは、獣なる者によって認識される。従って、獣なる者は、獣ならざるものを認識することはできない。

ところで、この『満月の夜の伝説』においては、聖なる者とはこの老隠者であり、獣なる者にして悪なる者とはこの盗賊あがりの牡牛のように純朴な弟子である。

問題は、この満月の夜にこの老隠者とこの弟子2人の前に姿を現した天からの降臨者である。この物語からの原文の引用は控えるけれども、その降臨者は、完璧に大天使ガブリエルの姿を取っていたのである。従って、この降臨者は、大天使ガブリエルの姿、悪霊、アナグマ、この三者が一体となっていたものだったのである。この三者一体である降臨者が、この弟子とこの老隠者の共通項となって、この救済が実現されているのである。この老隠者にとっては、この夜降臨してきたものは、まぎれもなく大天使ガブリエルとして認識されていて、悪霊としてもアナグマ（獣なるもの）としても認識されていなかった、否、そういうものとしては認識することはできなかつた、つまり、悪霊である正体を見破ることはできなかつた。つまり、この老隠者は、長年、神への祈りに全身全霊を捧げながら、とどのつまりには悪魔ルシファーに取りつかれていたのである。言い方をかえれば、彼の修業は魔境に入ってしまったのである。

しかし、悪の限りをつくしてきた盗賊あがりのこの弟子は、自分には本物の聖なるものが見えるはずはないことは師から教えられてよく知っていた。自分に見えるものや自分に認識できるものは悪魔的なものか、獣的なものかのいずれかのものでしかないことをよく知っていた。従って、今、彼の目の前に見えるものが、たとえ大天使ガブリエルの降臨現象であっても、それは本物であるはずはなかつた。これはおかしい、それは悪魔のいたずらか、獣が化けているに違いない、と彼は確信したのである。それ故、彼は迷わず矢を放った。

はたせるかな、彼が仕留めたものは一頭のアナグマであった。単なるアナグマが自力で大天使ガブリエルに化けることができるはずはなかろう。天使に化けることができるのは、やはり天使でなければできないのだ。つまり、今夜の満月の夜の出来事は、墮天使ルシファーがアナグマに憑依して起こした現象だったのである。しかし、満月のこの夜、この老隠者の眼前に出現していたのは、この老隠者の眼にはまぎれもなく大天使ガブリエルのいとも聖なる御姿であった。それ故、満月のこの夜、この老隠者が体験したのは、霊界の最高位にある大天使ガブリエルとの神秘的合一体験であると同時に、墮天使ルシファーの呪縛からの解放体験であった。しかも、こともあろうにこの老隠者をルシファーの呪縛から解放したのは、敬虔の念など全くない彼の弟子である牡牛のような愚者だったのである。こうしてこの老隠者の真の精神的自由はようやく完成されたのである。

西洋の神秘主義的思想家たちの考えでは、人間の最も完璧な精神の自由は、神との一体感の体験、つまり神への帰属体験によって得られるとされている。偉大な聖者たちが瞑想によって獲得しようと志向したものは、この種の自由・解放感・悟りである。方法、過程こそ異なるとしても、絶対的な自由な境地を目的とする点では、東洋の神秘的思想家も同様であろう。

ドイツの代表的な神秘主義的思想家であるマイスター・ヨハネス・エックハルト（1260 - 1327）は、次のように述べている。

聖パウロは、「たとい私がどのような行いを修めても、もし私が愛を懐いていなければ、私は虚しい」と語っている。しかしながら、私はすべての愛にもまして、離脱を賞讃するのである。その理由としてはまず第一に、愛にそなわっている最も優れた点とは、愛が私を強制して、私が神を愛するようにさせるということであるのに対して、離脱は神を強制して、神が私を愛するようにさせるからである。…神にとっての本性上固有な場所とは、一性と純一性であり、これは離脱から出来する。そのことから、神は離脱した心には自己自身を必然的に与えずにはいられないのである。二番目に、私が愛にもまして離脱を褒め讃える理由は、愛が私を強制して、私が万事を神のために耐え忍ぶようにさせるのに対して、離脱は私に、私が神以外の何ものをも受け容れることがないように仕向けるからである。<sup>(52)</sup>

ここでマイスター・エックハルトが賞讃している「離脱」は、『満月の夜の伝説』の主人公「隠者」が一生をかけてたどってきた行為と共通する業ではなかろうか。更にエックハルトは次のようにも述べている。

心が正しく保たれている人とは、神を本当に自分のすぐそばに所有している人のことである。…こういう人が神を本当に正しく所有しているのならば、しかも神のみを所有しているのであれば、何人たりといえどもこのような人間を妨げることはできないのである。<sup>(53)</sup>

神と一体の心境に達している人は、絶対的な自由無礙の心境に住しているのである。

エックハルトの思想と般若心経の思想との間に、多くの点で共通性を感じるのは、筆者の勘違いであろうか。エックハルトの言う「離脱」をつき進んで行って、彼自身がたどりついた境地は、真言密教の入我我入の境地ときわめて近い境地ではなかろうか。また、エックハルトが言う「離脱」という精神の営みは、禅で言う「空<sup>くう</sup>じる」という精神の営みと非常に近いのではなかろうか。

フーゴ・ラサール (1898 - 1990) という名前のイエズス会の神父がいた。この人もまたドイツ人であった。彼はキリスト教布教のため 1929 年、彼が 31 歳の時に来日した。彼はその後 60 年間、91 歳で逝去するまで、日本でキリスト教の布教に一生涯を捧げた。彼はこの間、日本人の心を理解するため、禅をもよくした。そして師家となって、多くの禅弟子をも育てた人である。1948 年には愛宮真備 (Hugo Makibi Enomiya Lassalle) という名前で日本に帰化した人である。彼は次のように述べている。

開悟について言えることは、それが起こる瞬間に色眼鏡が脱落し、またあるひとも言ったように、一切のレッテルが剥げ落ちるということである。この体験にまで突き進むことがうまくいかなくても、やはり眼鏡は坐禅の無をとおしてますます透明さを増す。すでに色眼鏡のことを知っているだけでも、多くの性急な、いつわりの判断からわれわれをまもることができよう。しかし、悟りに到達したときでさえ、その眼鏡がまた以前の色に戻らないよう用心しなければならない。悟ってする座禅も、悟らないでする座禅も、より大いなる内的自由への一つの道なのである。<sup>(54)</sup>

『満月の夜の伝説』の老隠者の神的体験が本物であるならば、彼の精神はエックハルトの言うように神と共にあって、神の絶対的自由を共に体験しているはずである。神への帰属体験によって、天使 (神的なもの) への帰属体験によって、この老隠者の自由は、絶対的即事的自由となるのである。

禅においても同様である。悟りが本物であるならば、その行者の心は、無等同の (等しきものない) 断突の最高の絶対的自由無礙の境地に正しく定住しているはずである。

この『満月の夜の伝説』という物語は、宗教に無関心な人にとってはとてもそうは読めないかもしれないけれども、筆者にとっては、この物語は宗教的神秘的自由をテーマとしている物語としても読むことができるのである。それにしても、この老隠者の到達した自由も、正にアポリアである。

## 2. 束縛状態の完全忘却としての自由

1992年、エンデ63歳の時の作品に『自由の牢獄』がある。これは、八つの短篇から構成されているが、その中の一つに、「ミスライムのカタコンベ」という短篇がある。ここでは、この短篇を取り上げることにしよう。本稿の筆者の本節の標題のとおり、束縛されていることを完全に忘却してしまった状態を自由の一つの形態として捉える関係上、ここではこの物語の中の「影の民」を中心としてこの短篇を考察することにする。

この物語の舞台は、ミスライムのカタコンベと呼ばれている出口（入り口）も窓も一つもない巨大な岩窟の中である。巨大な岩窟と言っても、これは明らかに、アインシュタインの考えた湾曲している時空間に閉ざされている大宇宙を念頭においたものであろう。ここでは、このカタコンベが「閉ざされている」ということが、重要である。

この閉ざされているカタコンベ（墓穴）の住人が、「影の民」である。「影の民」はここで、働き、眠り、生殖する。つまり、カタコンベ（墓穴）の住民「影の民」というのは、死者たちを念頭においているのではなく、この宇宙の中に存在し、生きている我々、人間のことなのである。

このカタコンベという名の一つの宇宙系（例えば太陽系のようなもの）は一人の独裁者によって支配されている。その名はベヒモートである。今までにベヒモートの姿を見たことのある者は「影の民」の一人としていない。しかし、ベヒモートは声としてこのカタコンベに遍在し、「影の民」は命令されているという意識さえなく、この声の命ずるままに生活している。起きろと言われれば起き、寝ろと言われれば寝る。働けと言われれば働き、左へ行けと言われれば左へ行き、右へ行けと言われれば右へ行く。「影の民」で、この「声」に疑問を持つ者は一人もいない、ましてや反抗を企てる者など一人もいない。「声」に従うことは自明のことであり、「影の民」は一人残らず自分たちの存在そのものに満足しきっているのである。また、「影の民」の誰一人として、このカタコンベから外へ出てみようと思ったことさえないし、カタコンベの外の世界を想像してみたことさえもない。

ところが、「影の民」のあるたった一人の青年—その名はイヴリィ—だけが、ある日突然、悟ったのである。その悟りは夢の中で訪れた。イヴリィはその夢の中で、このカタコンベのどこにもあるはずもないのぞき穴（窓）を見つけ、その窓からカタコンベの外の世界を見てしまったのである。イヴリィが目覚めると、彼の頬は涙でぬれていた。しかし、その窓から見えた景色は全然思い出すことはできなかった。その涙の意味も不明・謎であった。

次の日の夜、いつものように「眠れ！」というベヒモートの声がカタコンベに流れた時、イヴリィは今まで「影の民」の誰一人としてしたことの無い犯罪行為を犯した。イヴリィは、一人自分の寝床から起き上がってカタコンベの廊下をさまよい歩いて、きのう見た夢を思い出してはここぞと思われる岩の壁に、夢に見た窓をチョークで描いて歩いたのである。もしかしたら、その描いた窓からカタコンベの外の世界が見えるかもしれないという希望に駆りたてられて、ここぞと思われる所に数えきれない程あちこちに窓を描いてみた。しかもそれはベヒモートの警告に逆らって、毎晩のように続けられた。しかし、その窓が開くことはけっしてなかった。また、不思議なことに彼がチョークで描いた窓は、次の日の朝にはすべてきれいに消し去られているのであった。

こんなことがいつまでも続いたわけではない。程なく、イヴリィはベヒモートによって「影の民」としての存在を抹消されたのである。殺されたのではなく、消されたのだ。それからというもの、ベヒモートの声は一切聞こえなくなってしまった。だから、何をすることも、自分の意志でしなければならなくなった。これは思いの外、苦しいことだった。これまで与えられていた食料も与えられなくなった。彼の寝床には、他の「影の民」が眠るようになった。何よりも苦しいことは、今までの友人、知人、仕事仲間の誰一人として、自分がすぐ側にいるのにも拘らず、自分の存在に気づいてくれないことである。あれほど親しかった者たちからも完全に無視されたのである。イヴリィにとっては、この孤独が死よりも苦しかった。しかし、イヴリィは自殺へは走らなかった。カタコンベの岩の壁に窓を描き続けていけば、いつかはその窓からカタコンベの外の世界を見ることができるようになるのではないか、という希望が彼を生かし続けたのである。しかし、彼が隠し持っていたチョークはどんどん摩滅していった。ついに彼は、全身の注意を集中して最後の窓を描いた。しかし、その窓は開かなかった。外の世界は見えてこなかった。ついに彼は、絶望して首を吊った。再び意識を取り戻した時は、カタコンベの牢獄の中であった。そこへ、2人の若い男女が忍び込んできて、助けてやるからついて来い、と言う。カタコンベの奥へた

どり着くと、2人はあらかじめうち合わせておいた暗号に従ってやっているかのように、コツコツと壁を叩いた。岩戸は開いた。扉から滑り込むと、そこもやはり巨大な岩窟であった。

彼らの話によると、ここは、カタコンベの独裁者ベヒモートに反抗する秘密結社のアジトで、その総帥は、医学博士マダム・レヴィオタン女史だという。その巨大な岩窟にはたくさんのガラス張りの促成栽培室が建ち並び、その中心には水晶宮がそびえ立っていた。その促成栽培室には、意識を麻痺させるような腐敗臭の強い見るからに気持の悪いキノコが栽培されていた。水晶宮にたどりつくると、マダム・レヴィオタンが姿を現した。

マダム・レヴィオタンの話によると、こうである。独裁者の支配欲・権力欲というものは、被支配者を苦しめることによってしか満たされないものである。あの、窓一つないカタコンベ系宇宙は、独裁者ベヒモートの権力欲を満たすために「影の民」に極度に苦痛を与えるのに最も適するように設計されたシステムである。医師の従うべき絶対的な倫理は、人々を苦痛から救うことである。それ故、自分マダム・レヴィオタンは、「影の民」の苦痛を完全に忘れさせる薬 GUL を開発して、ベヒモートの欲望に逆らって、「影の民」にその忘却剤をひそかに投与しているのだ。その忘却剤は、ここに栽培されているキノコから製造される。けれどもこの促成栽培施設は既に老朽化していて、いたる所が壊れている。おまえを救い出してここへ連れてきたのは、おまえにこの促成栽培施設を修繕する仕事を引き受けて欲しいからだ。この仕事は、おまえにしかできない。なぜならおまえは、「影の民」の特異体質の持ち主で、おまえにだけは、このキノコから製造する忘却剤は効かないからだ、と言う。イヴリィは、同朋の「影の民」を苦痛から救うという大義に賛同して、マダム・レヴィオタンに協力する。毎日、朝から晩まで、疲れて倒れ込みそのまま眠り込む程、働く。しかし、この仕事に終わりはない。ここを修繕すると、すぐまたあそこが壊れてくるのである。

ある日、イヴリィは、水晶宮から最も遠い所にある促成栽培室の中で、想像もできない程高齢の今にも死にそうな老人と出会う。その老人は、イヴリィの前任者でこの促成栽培施設の設計者だという。この老人も若かりし頃、レヴィオタンの言葉を信じて彼女に協力した。しかし、彼女の正体はベヒモートの情婦で、彼女は、ベヒモートが「影の民」を奴隷化して支配する手伝いをしているにすぎないのだ、と言う。

「彼らにこの忌まわしい麻薬を与えると、彼らは何もかも全部忘れてしま



う。そうだと、自分たちが捕虜であることさえも忘れてしまう。いつも影の民だったわけではないことも、ミスライムのカタコンベの外側には他の世界があって、自分たちはその世界からやってきたのだということも忘れてしまう。以前も以後も全部忘れてしまう。ありとあらゆる疑問も憧れも、ことごとく忘れてしまう。そうさ、彼らは今あるがままの自分に満足しているのさ、なぜなら記憶というものが全然ないのだから、ものを較べてみようにも較べるものがないからさ。彼らが持っているのは今という瞬間だけなのさ。奴隷であることを認識しない奴隷は、御しやすい奴隷ってのもさ、捕囚生活しか知らない捕囚は、自由でないことに苦しまない。これがあの慰め女のしている手伝いのからくりなのだ。」…

イヴリィは老人の顔をまじまじと見て、つぶやいた。

「おれの窓…おれの窓は…やっぱりおれは正しかったのだ。…あの窓の向こうにはやっぱり何か別のものがあつたのだ。」…今やイヴリィは、この老人の言ったことは、全部真実であると確信した。そして今、その真実が再び明確に認識された時、激しい怒りがこみあげてきて、全身が痛んだ。<sup>(55)</sup>

ミスライムのカタコンベから脱出する道を見つけるためには、この促成栽培施設を全部破壊する他に道はない、とその老人は言うのである。

修繕する作業にくらべれば破壊する作業は早く進んだ。最後の施設が瓦礫と化し、最後の照明も打ち壊された。暗闇の中を手探りで進んだ。今度は幸運が味方して、イヴリィは昔ここへ来た時通った岩戸から、再びもとのカタコンベに戻ることができたのである。はじめは、何も変わった様子はなかった。昔のままだった。しかしそれは、長くは続かなかつた。やがて一人、また二人と、苦しみ、もだえ、叫び、狂乱状態に陥った。GULの禁断症状が現れ始めたのである。それは急速に三人、四人へと広がり、たちまちのうちに影の民全員が狂乱状態に陥り、カタコンベ系全体が阿鼻叫喚地獄と化した。イヴリィは、この混乱を目的ある反乱へ転化させねばならないと思った。台の上に立ち、自分が体験したことをつぶさに語り、団結して戦い、暴力は暴力で打ち破り、独裁者から自由を取り戻そうと訴えた。

カタコンベの混乱は徐々にイヴリィの示す方向へ向かい始めた。群集は行進しながら叫んだ。「出てこーい、ベヒモート！ 姿を見せろ、ベヒモート！ お前の時代は終わったのだ。——おれたちは出て行きたいのだ。」…突然、洞窟の先の岩壁に亀裂が走り、燦然と光が射し込んできた。「おれに続け！」イヴリィは叫んだ。「あそこだ！ あれが出口だ。」<sup>(56)</sup>その光の中に2人のシルエットが浮

かんだ。ベヒモートとレヴィオタンが立ちはだかったのだ。

「出て行きたい者は出て行くがよい。誰もその者を引き止めはせぬ。…だが、ここでおまえたちに問おう。——いいか、胸に手を当てて、自分自身に正直に答えるのだ——おまえたちのうちで、わしの支配下で苦しんだ者が一人でもいたか、わしのくびきのもとで重苦にあえいだ者が一人でもいたか？ 古き秩序があった時、おまえたちは自分たちの生き方に満足していたのではないか。わしら二人は、おまえたちの幸な生活のために努力してきたのではないか。さあ、言うがよい——正直にな——おまえたちのうちで、捕囚の身と感じ、それを不幸と感じた者はいたのか？

「おれだ！」イヴリイは叫んだ。

「この男一人だ。」彼は言った。「おまえたち全員のうちで、この男たった一人だ。この者は他の者と違うのだ。この男は特異な奴で、おまえたちの仲間ではないのだ。」

「しかし今は、」多くの者が声をそろえて叫んだ。「おれたちは皆、彼と同じように感じているのだ。以前は、我々は盲目であった。我々に何が起きているのか知らなかった。彼は我々の目を開かせてくれた。今はおれたちは知っているぞ、おまえたちがおれたちに何をしてきたかを。」

ここで初めて慰め女が口を開いた。

「…おまえたちは本当にそれを知っているというのかい。おまえたちが知っているのはこの男が言ったことだけよ。この男こそがおまえたちに苦痛をもたらした張本人だということは話したかい？ 今まで、おまえたちの苦痛をおまえたちから取り除く薬を製造していた施設があったのに、その施設を壊してしまったのはこの男なのだよ。その薬が今は手に入らなくなったのはこの男一人のせいなのだよ。この薬がいるかいないか、この男はおまえたちにたずねたのかい？ …この男がおまえたちに代わって勝手に決めたのよ。でも、なぜそうしたか、その理由を、この男はおまえたちに言ったかい？ この薬がこの男には効かないからさ。だからこの男は、自分の苦しみと同じ苦しみをおまえたちにも苦しませようとして、この男がしたいと思っていることをおまえたちもしたがるように仕向けようとして、おまえたち皆を病気にしたのよ。なぜなら、この男は自分一人ではミスライムのカタコンベから出るこの出口を見つけることはできなかつただろうからね。さあ、言ってごらん、おまえたちを利用したのはいったい誰かい、おまえたちを道具として利用したのはいったい誰だい？ 自分の目的を達

成するためにおまえたち皆を苦痛と不安と絶望に陥れたこの男なのかい、それとも、おまえたちをそんな日に遭わせまいとしてあらゆる手を尽くしてきたこの私たちだと言うのかい？」

影の民は迷った。迷っているまなざしや、疑いのまなざしや、すでに憎しみを含んだまなざしさえも、イヴリィに向けられた。

「聞いてくれ！」彼は叫んだ。「おれたちは皆で協力して外へ出るこの出口を見つけたのだ。さあ、皆でこの捕囚生活から脱出しようじゃないか。この2人が我々を囚人にしていたということは確かだし、我々全員、ここから脱出したいと思っていることも確かだ。」

ここで再び鉛色の男が口を開いた。

「彼は言う、おまえたちはそこへ出て行きたいのだと。しかし、君たちは知っているのか、そこでおまえたちを待っているのは何なのか？ その世界はおまえたちに住める世界ではないのだぞ。情け容赦ない光からして、おまえたちを粉々に粉碎するだろう。上も下もわからなくなる。おまえたちが頼れるのはそこには何もない。巨大な空虚がおまえたちを呑み込む。一回呼吸することさえ、心臓が一回鼓動を打つことさえ、自分で決めなければならないのだ。そしてそれらの一つ一つの決断がことごとく、永遠におまえたちを縛ることになるのだぞ。もう一度言おう。その世界はおまえたちが住める世界ではない。だからこそその昔、おまえたち影の民は、その世界からこの地下へ逃げてきて、あの耐えられない光から救ってくれと私たちの所へ頼み込んできたのだ。一度だって我々はおまえたちを捕縛しておいたことなぞない、それはおまえたち自身の意志だったのだ。わたしたちはおまえたちの意志に従っただけだ。…わたしたちはおまえたちと一緒にあって、そしておまえたちのために、このミスライムのカタコンベを造ったのだ。しかも、できる限り快適になるように。それなのにおまえたちは今、これをすべて破壊しようと言うのか、ここにいるこの男のために、おまえたちとは異なるこの男一人のために。よく考えるのだ！ 今ならまだ遅すぎることはない。おまえたちがその気なら、今すぐなら復興に着手することができるのだ。すべて元通りにすることができるのだ。さあ、自分たちで決めるがよい！ この男と一緒に行って滅亡するのか、——それとも自分たちでこの男を追放して、永遠にこの男から解放されるのか。…」<sup>(57)</sup>

影の民は、完全に覚醒した意識の中で、しかも完全な自由意志の中で、イヴリィに従うか、それともベヒモートに従うか、自分たちで自分たちの進路を決

定するよう求められたのである。

シーンと静まりかえった。誰もが明るすぎる光から顔を背けていた。手に手に握り、振りかざしていた棒や管はだらりとおろされて、イヴリィに向けられた。イヴリィの顔も見ずに、彼らはイヴリィを壁の裂け目の方へ棒で突いて押しやった。何もかも、沈黙のうちに実行された。イヴリィは抵抗しなかった。その裂け目から外へ押し出された瞬間、イヴリィは初めて耳をつんざくような絶叫をあげた。…影の民は誰もみな、その絶叫を聞いた。しかしそれが、歓喜の極みの絶叫だったのか、最後の決定的な絶望の悲鳴だったのか、後になって言える者は誰一人としていなかった。<sup>(58)</sup>

ここでは、イヴリィにではなく影の民に考察の焦点を合わせることにしよう。今、この場にいる影の民は、完全な覚醒状態におかれていた。そのうえで、カタコンベの外の世界へ出て行けばあなる、カタコンベの中の世界へ戻ればこうなると、真実が開示されたのである。そのうえ完全な選択の自由をも与えられていた。彼らは、カタコンベの外の世界を捨てて、カタコンベの中の世界を選び取った。光の世界を捨てて、闇の世界を選び取った。完全自己決定の世界を捨てて、完全捕囚の生活を選び取ったのである。それと同時に、GULを投与されることをも選び取ったのである。GULが投与されれば、束縛されているという意識そのものを持たなくなる。また、束縛されている状態から生ずる可能性のある苦痛も完全に麻痺する。従って、束縛の苦痛からも完全に解放される。そして今となつては、そして未来永劫に、このカタコンベ系宇宙には、イヴリィのようにこの影の民に対して側から客観的にとやかく言う者は存在しなくなる。

さて、このカタコンベ系の影の民の存在は自由そのものなのであろうか？ それとも…？ いや、やはりこの「影の民」は精神的には確かに完全に自由なのである。

しかし、この影の民の自由も、やはりアポリアなのである。

## 注

- (1) Michael Ende ›Jim Knopf und die Wilde 13‹ Thienemanns Verlag  
1962年 221 ページ
- (2) 子安美知子著『エンデと語る』 朝日新聞社 1986年 88～90 ページ
- (3) ルドルフ・シュタイナー著、廣嶋準訓訳『社会問題の核心』 人智学出版社 1981年 65 ページ
- (4) これはもともと近世イギリスの哲学者 Thomas Hobbes (1588 - 1679) の

言葉である。この言葉は、自然権（自己生存権）を確保する近世の契約社会に入る以前の原始社会の社会状態を表す言葉として有名である。

- (5) エンデ全集 15『オリーブの森で語りあう』（原題：PHANTASIE KULTUR POLITIK Protokoll eines Gesprächs 1982年 Weitbrecht Verlag）丘沢静也訳 1997年 岩波書店 63～66ページ
- (6) Rudolf Steiner 著『DIE PHILOSOPHIE DER FREIHEIT』Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung 1996年 15ページ この本の本文は、1918年に初版が出されたルドルフ・シュタイナー全集の中の同じ標題の巻、Nr.4に準拠したものである。
- (7) 子安美知子著『エンデと語る』朝日新聞社 1986年 50～52ページ
- (8) 「朝日ジャーナル」1989年4月28日号 40ページ
- (9) エンデ全集 15『オリーブの森で語りあう』岩波書店 1997年 65ページ
- (10) ミヒャエル・エンデ／河邑厚徳著 NHKアインシュタイン・ロマン 第6巻「エンデの文明砂漠」1991年12月、64～65ページ
- (11) Michael Ende『Der Spiegel im Spiegel』Weitbrecht Verlag 1994年 299ページ

人間は自由でもないし、創造力も持ってはいない、という古来から根強く存続してきている主張を、エンデは、1988年、彼が59歳の時の著書『サーカス物語』の中でも、次のように演出している。

アングラマイン： 新しいものなんかありゃしないよ、新しく生まれてくるものなんか何もありゃしない！ 世界は渦をまいてる塵に過ぎない。創造力なんて！ そんなものはお猿さんの昔からのお遊びよ。昔からあるものの単なる繰り返しにすぎないのよ。

エリ： でも、もしも誰も創造しなかったとしたら、あなたが支配しようとしているこの明日の国も存在しないのではないかしら。

アングラマイン： これは昔からここにあったのよ——そうよ、これで十分よ。新しいものなんか何ひとつ付け加えられてはいない。そいつの言っていることは、ありもしないことよ。私は完全、無欠だもの！

ジョジョ： あなたは、自分の知らないことは、世間の人にも認められてはならない、とでも言うつもりなのかしら？ 想像も存在しない、とでも言うつもりなのかしら？ 未来の世界はそこからしか生まれてこないのよ。

私たちが創り出した世界では、私たちは自由そのものよ。

アングラマイン： 自由なんか嘘っぱち、何もかもがんじがらめよ！ 私た

ちを取り囲み、私たちがいやおうなく動かしているのは必然性よ。そいつの言っていることは、ありもしないことよ。私は完全、無欠なもの！

(Michael Ende ›Das Gauklermärchen‹ dtv 1988年 96～97ページ)

(12) 聞き手・編訳 田村都志夫『ものがたりの余白 エンデが最後に話したこと』岩波書店 2000年 185～186ページ。この本の原題は›Michael Ende's last conversation interviewed, edited and translated by Toshio Tamura‹ Tienemanns Verlag 2000年である。

(13) 『モモ』については、小林良孝著「ミヒャエル・エンデ『モモ』における時間の本質について」(静岡大学人文学部 人文論集 第53号の1 2002年7月 97～150ページ)、『はてしない物語』については、小林良孝著「ミヒャエル・エンデ著『はてしない物語』における成長過程と成長概念について」(静岡大学人文学部 人文論集 第52号の2 2004年1月 85～142ページ)を参照のこと。

(14) Michael Ende ›MOMO‹ Thienemanns Verlag 1993年 227ページ

(15) 同書 242ページ

(16) Michael Ende ›Das Gefängnis der Freiheit‹ Weitbrecht Verlag 1992年 7ページ

(17) 同書 41～42ページ

(18) 同書 42ページ

(19) 同書 77ページ

(20) 同書 73ページで、シリルは、つまりエンデは、次のように述懐している。

およそ記憶とは何なのか、記憶というものはどこから来るのか、これがわからないのだから、このことについても何ら確実性があるわけではない。もしそうならば、もし時間というものは我々の意識が時間のない世界をどう知覚したかという知覚の仕方以外の何ものでもないとすれば、近い未来に、あるいは遠い未来に、我々の身に起こることの記憶だって、存在するはずがないという理由がどこにあるのか。」

(21) 同書 91ページ

(22) 同書 82ページ

(23) Erich Fromm ›Fear of Freedom‹ Routledge & Kegan Paul LTD. 1942年 17ページ

(24) 同書 18ページ

(25) Michael Ende ›Die unendliche Geschichte‹ Thienemanns Verlag 1979

年 371 ~ 372 ページ

- (26) Michael Ende ›Das Gefängnis der Freiheit‹ Weitbrecht Verlag 1992年 161 ページ
- (27) 同書 164 ページ
- (28) Michael Ende ›Jim Knopf und die Wilde 13‹ Thienemanns Verlag 1962年 218 ページ
- (29) Michael Ende ›MOMO‹ Thienemanns Verlag 1993年 96 ページ
- (30) 小林良孝著「ミヒャエル・エンデ著『はてしない物語』における成長過程と成長概念について」静岡大学人文論集 第54号の2 85 ~ 142 ページ参照
- (31) Erich Fromm ›Fear of Freedom‹ Routledge & Kegan Paul LTD. 1942年 pp. 99 ~ 100
- (32) Michael Ende ›Die unendliche Geschichte‹ Thienemanns Verlag 1979年 280 ~ 281 ページ
- (33) 同書 408 ~ 409 ページ
- (34) Michael Ende ›Lenchens Geheimnis‹ Thienemanns Verlag 1991年 11 ~ 12 ページ
- (35) Michael Ende ›MOMO‹ Thienemanns Verlag 1993年 58 ~ 59 ページ
- (36) 同書 66 ~ 67 ページ
- (37) エンデ全集 17『闇の考古学』丘沢静也訳 岩波書店 1997年 219 ページ
- (38) Michael Ende ›MOMO‹ Thienemanns Verlag 1993年 231 ページ
- (39) 同書 150 ~ 151 ページ
- (40) 同書 245 ページ
- (41) 同書 130 ~ 131 ページ
- (42) 子安美知子著『エンデと語る』 朝日新聞社 1986年 122 ページ
- (43) Michael Ende ›Die Vollmondlegende‹ Weitbrecht Verlag 1993年 9 ~ 11 ページ
- (44) 同書 11 ページ
- (45) 同書 11 ~ 13 ページ
- (46) 旧約聖書「出エジプト記」3.1-4で次のように述べられている。モーセはミデヤンの司祭で彼のしゅうと、イテロの羊を飼っていた。彼はその群を荒野の西側に追っていき、神の山ホレブにやってきた。すると主の使いが彼に現れた。柴の中の火の炎の中であった。よく見ると、火で燃えていたのに柴は焼け尽きなかった。

モーゼは言った。「なぜ柴が燃えていないのか、あちらへ行ってこの大いなる光景を見ることにしよう。」

主は彼が横切って見に来るのをご覧になった。神は柴の中から彼を呼び、「モーセ、モーセ。」と仰せられた。(聖書 新改訳 のちのことば社 1970年 90ページ)

- (47) Michael Ende ›Die Vollmondlegende‹ Weitbrecht Verlag 1993年 23～26 ページ
- (48) 同書 29 ページ
- (49) 同書 30 ページ
- (50) 同書 40 ページ
- (51) 同書 42 ページ
- (52) ドイツ神秘主義叢書3 『エックハルト論述集』川崎幸夫訳 創文社 168 ページ
- (53) 同書 91 ページ
- (54) エノミヤ・ラサール著、柴田健作訳『禅と神秘思想』春秋社 1987年 86 ページ。なお、ラサールの禅については、拙著『キリスト教と禅との出会い Hugo Makibi Enomiya Lassalle の場合』静岡大学人文論集 第47号の1 229～261 ページを参照のこと。
- (55) Michael Ende ›Das Gefängnis der Freiheit‹ Weitbrecht Verlag 1992年 187～188 ページ
- (56) 同書 194～195 ページ
- (57) 同書 197～201 ページ
- (58) 同書 202 ページ